

俳句雜誌

令和元年十一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第十一号

水 明

2019 11月号



信 風 節 季



葉は

布袋さまの

腹に似て

花は

刷毛に

似ているから

眉はけ万年青

なるほど

水 明

第1070号

―歴代主宰の一句―

夜のテレビに生ける久女や露寒し

長谷川かな女

焼く手紙焼かぬ手紙や紙の留守

長谷川秋子

冬隣西郷像の裾汚れ

星野紗一

水明

令和元年
11月号

歴代主宰の一句

萩の門 (作品)

山本鬼之介

4 1

秋まつり (近詠)

山中みどり

6

河内川ダム (近詠)

島津初花

7

雪嶺讃歌 ※雪欄作家近詠鑑賞

五明昇

8

季音「雪」 (同人作品)

山中順子
山中みどり
ほか

10

季音「月」 (同人作品)

藤澤喜久
吉澤純枝
ほか

17

季音「花」 (同人作品)

田中千穂
大場順子
森川義子
ほか

22

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

54

現代俳句鑑賞

網野月を

28

金の鈴銀の鈴 ※季音月評

町野広子

30

☆季音賞作家の頁

藤澤喜久
荒井俱子
池田雅夫

32



水明集

原田 秀子
日高 徹
正木 萬蝶
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

48

水 琴 窟（水明集九月号鑑賞）

池田 雅夫

52

俳誌望見

梅澤 佐江

27

句集喝采

井口 俊晴

57

りんどう忌の記

越田 栄子

58

水明の記事転載他誌転載

71

水明例会報・各地句会報

60
・
63

新珠賞作品募集

70

九十周年・新春俳句大会のお知らせ

68
・
71

水明発展基金御礼

73

風声・後記

72
・
74

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

萩の門

山本 鬼之介

掌の準備体操さやけしや

門限を守らぬむすめ月鈴子

砥石の音つづく無月の一軒家

隈取りをとれば優男よ居待月
行きつけの来来軒の秋灯
散り初むる萩を片方の冠木門
車内化粧の一部始終を秋あはれ
秋空や進みがちな腹時計

秋まつり

山中みどり

鳳凰の稲穂が揺るる大神輿
むらさきの細き鉢巻祭りの娘
お囃子の笛の尾長く秋祭
輪踊りの袖すり抜ける秋の風
撫で牛の尻あたたかし秋の宮
遙か見る神牛の瞳秋の雲
乾きたる千社札より秋の蝶

東京は初夏、神田明神から始まる夏祭が多い。私の住む本所は九月十五日牛嶋神社の秋祭。神輿担ぎの同好会の連中にとつては謂わば担ぎ納めであるらしい。五年に一度の大祭には黒い牛に曳かれた鳳輦に御霊が乗られて五十有町会をくまなく廻られる。その返礼に各町会の神輿が早朝から夕刻迄、宮入りをする。牛嶋の石の大きな撫で牛はどつかりと鎮座して人々に撫でられつるつるとしている。牛嶋の祭りが終ると必ず雨が降り、そして涼風が吹き、この川のある下町に秋の気配が色濃くなるのである。

河内川ダム

島津初花

ふる里に豊かな秋の水源地
夏の果水面に映える杉林
山寺の裏の瀬音か河鹿笛
秋風や山峡跨ぐ赤い橋
放水の飛沫の果てに秋の虹
岩魚焼く匂ひも山の宿料理
山神の鎮まるダムの秋澄めり

熊川宿の南端の山道を登ると、北川の上流である若狭駒ヶ岳が水源の河内川に沿って河内村落があった。古くは千二百年代にこの谷に人が住んで、昭和初期には八八戸、人口が四百人生活していた。
河内川ダム建設計画が、昭和五七年に始まり十数年の調査と住民の決断で成立し、寺、神社、分校と三五世帯の大移転が始まり、おおよそ四十年余りの歳月を経て、令和元年六月に、美しい景観のダムが完成したのです。

雪嶺讚歌

●季音雪欄作家近詠鑑賞

五 明 昇

◇庭の花づくし（八月号）

朝の吸気ローズマリーに触れてより

永野 史代

庭に咲き乱れる花々の中で、作者を虜にしているハーブはラテン語で「草」を意味する「ヘルバ」を語源とし、今では「健康や美容に役立つ植物」として広く活用されている。ローズマリーは全体に芳香があり、主として香料に用いられる植物。作者の朝はこの花の香りに触れることから始まる

振花や観世紙縵の和綴本

振花はラン科の多年草で原野・芝生などに自生。桃紅色の花がらせん状に振れてつくためネジバナと呼ばれる。作者はその様を紙を細長く切つて縵つた観世紙縵と取り合わせ、庭先にシテ方家元観世大夫の幻影をも浮かべて見せる。

なだれ咲く夕のうつぎは思慕の色

掲句を目にして、昭和二十五年に岡本敦郎が歌つたラジオ歌謡『白い花の咲く頃』を想起された方もおられよう。夕べになだれ咲く白い卵の花は、若き日に田舎から都会をめざした多くの人が思い出す故郷の光景だ。この花に思慕の情感を重ねる作者の感性に共鳴する。

◇奥野ビル（八月号）

外観は昭和レトロよ夏館

大村 節代

東京都中央区銀座一丁目。中央通りからほど近い場所に、ギャラリーやアンティークショップが集まる古いビルがある。築八十五年を迎えた奥野ビルは、今も外観や内装は当時のまま残され、レトロなデザインの高貴なビルだ。このビルで作者は昭和初期にタイムスリップしたような錯覚を味わった。

きらら虫軋みつ動く昇降機

かつては「銀座アパートメント」と呼ばれ、銀座屈指の高級アパートだった奥野ビルは、民間住宅では初の手動式エレベーターを設置し各部屋に電話も引いていたと云う。原始的な昆虫きらら虫とエレベーターとの取り合わせが見事。

木版画飾る小部屋に七変化

各部屋は三・五坪ほどのワンルームだったと云う。現在は二十軒ほどのギャラリーやショップが入り、アートビルとしての人気が高い。その一つ、木版画を展示している部屋に入ると、一隅に紫陽花が飾られ心和む雰囲気は漂っていた。レトロな夏館に集う現代版モガ・モボの面影が過る。

◇夕 虹（九月号）

菊池ひろこ

夕虹や掠れて読めぬ羽虫の句

夕空に立つ虹は晴天の続く前兆。その夕虹の中で作者が読みあぐねている羽虫の句は、花巻市のイーハトーブ館近くにある「宮沢賢治句稿」の石碑であろうか。そこには東北菊花展を詠んだ「菊株の湯気を漂ふ羽虫かな」の句が刻まれている。夕虹の明るさと石碑のほの暗さのコントラストが、なんとも不思議な賢治の童話の世界を伺わせるのだが…。

男滝より女滝は見えず神の域

中山道馬籠宿と妻籠宿の中間にある南木曾町の男滝・女滝は、吉川英治の小説『宮本武蔵』の舞台となった滝で、武蔵とお通の情念の恋の場として登場する。男滝、女滝は谷を違って落下することが多く、ワンシヨットに収めることは難しい。想って添い難き男女の仲もまた然りか。

夏星の枝に揺り籠流浪の民

『流浪の民』はドイツの作曲家シューマンによって制作された歌曲集で、ナイル川のほとりからスペインにたどり着き、さらに欧州の町々を徘徊するロマ（ジプシー）の悲しさを歌っている。夏星の枝に揺り籠を下げ、焚火を囲んで荒々しくフラメンコを踊る一団、夢に楽土を求める流浪の民に光あれ。

◇護国寺（九月号）

鈴木 康世

夥し一言地蔵蟻の攀ぶ

作者の訪れた護国寺は、天和元年（一六八一）に五代将軍徳川綱吉により、生母の桂昌院の発願寺として創建された。境内の「一言地蔵」は一言だけの願いを叶えてくれるパワースポットとして有名だが、その地蔵に夥しい蟻が攀じ登っている。これだけの蟻の一言を聞くのはさすがに大変だろう。荘厳な古刹の中でバイアスの利いた一句だ。

剥落の見ゆ大師堂濃紫陽花

護国寺は新義真言宗豊山派大本山。関東大震災と大戦の被害を逃れ、創建当時のお堂が残る城内でも有数の大寺院である。観音堂（本堂）、仁王門、不老門、月光殿、薬師堂などの堂宇が保存、再建されていて壮観だ。中でも空海の尊像を祀る大師堂は、真言宗伽藍における格式の高さ、中世的な伝統を重んじた荘重な建造物で、歴史の重みを感じさせる。

元勲の廟は閉ざされ梅雨の蝶

本堂の裏手には墓地が広がり、幕末から明治時代にかけて活躍した大隈重信、三重実美、山県有朋などの元勲も眠っている。奇しくも四万六千日の一日、都心とは思えない空間の中で、心身ともに癒やされた作者であった。

季
音
雪



秋
山中順子

信玄を吟じ雨月の古戦場
山坊の魚鼓の木霊や月の雨
月出でてむらさきいろの煙出し
この晩歳跳ぶに助走を秋の水
秋夕焼天地の限り焦がしけり

クラス会
山中みどり

秋澄むや傘寿媼のクラス会
口紅をやや濃く秋のクラス会
秋の昼ゆらりとひらく茉莉花茶
金木犀記憶のずれる友と居て
人に会ふ疲れマスカットの重さ程

甘露 由良 ゆら女

同窓会 網野月を

初さんま大海原に研かれて
鳥渡る空の信号知りつくし
道祖神永久に抱き合ひそばの花
小さく古い心のびやか敬老日
酔ひ覚めの甘露と降れる今日の月

砂利道やトルコ桔梗を持って参る
水上の煙だつたら女郎花
萩を訪ふ内ポケットにペン挿して
つば広の帽子を深く秋時雨
秋時雨 同窓会の帰り道

いたこ 吉住光弥

ラガーシャツ 石井喜恵

魚裂きし干物の匂ひ浜秋暑
即身物祠に雨の白桔梗
信濃路は「いたこ」の里や白桔梗
蹲踞や碎け散る月掌に受くる
緻ちをつくす雲に心や暮の秋

鰯雲枝に掛けたるラガーシャツ
文机に疵あと著き残暑かな
捲き上ぐる帆柱百本秋夕焼
草稿の柀目浮き立つ宵の月
ひとりでは勿体無き夜月天心

月天心 石山かつ子

般若湯 大村節代

赤べこの領くばかり秋暑し
尻でんと土に据ゑたる種茄子
月天心程よき石に腰おろす
村々は山に添ひたる望の月
実むらさき朝の空気を深く深く

隠れ耶蘇川を隔てて雁の列
耳塚の謂れ読む人みだれ萩
作り顔の女の会釈秋暑し
秋鯖や飯屋に集ふ噂好き
訃報あり今宵は月と般若湯

落 鮎 大橋 廸代

処 暑 栢尾 さく子

落鮎や鬼手仏心で打つ投網
軸の染みやけに気になるかな女の忌
グラマーの統ぶ城まつり秋暑し
きのこ直立曲はサンバに変わりたり
こほろぎや既読メールの誤字脱字

処暑の水巡らせ武蔵国分寺
冷まじき柩の上の日本刀
蝮草実となるひそひそ雨の中
腰骨にきまりて処暑の男帯
とりかぶと一人は先に帰りけり

星月夜 菊池ひろこ

磨ぎ汁の流れに消ゆる星月夜
星月夜地に置く深きカレー鍋
お針子の屋根裏部屋に秋の声
銀幕にするり入りこむ生身魂
利き腕にフランスパンを生身魂

秋ざれ 五明昇

俯きて何ぞ哀しき踊笠
名水に典座が捌く新豆腐
安房一国搦め捕つたり鱚雲
点景の牛動かざる大花野
安曇野の鳶裏返す初嵐

鈴 虫 小林萬二郎

土に生れ水は天から月鈴子
草原に闇が育てし月鈴子
内陣は霊住むところ秋ともし
御神木の謂れは口伝秋澄めり
秋澄みて指呼に峨峨たり劍岳

山の影 境 延昭

新涼の山ふところに山の影
秋の風牛が草食む草千里
岸壁に鉄鑄にほふ残暑かな
絶筆の破調の一句蓼の花
イーゼルにニスの香かすか草の花

ねむり波

椎野美代子

十三夜

鈴木康世

袖振草大波小波ねむり波
袖振草秘すべきものは袖隠し
馴れつこい袖振草に手負傷
袖振草一方的に招かるる
額田王の袖は茜ぞ袖振草

影富士を揺らす風立つ十三夜
肩が知る手の温もりや十三夜
新涼や欄間に富士の透かし彫
十三夜仏間に点す絵蠟燭
いささかのワインに酔ひし十三夜

新米 島津初花

遠き人 永野史代

舗装路に火照りを残し秋の草
はやばやと道塞ぎたる秋の草
新米磨ぐ厨に軽ろし母の声
新米や仏飯の山高く盛る
秋茄子万に飾る施餓鬼棚

蛸やみいんな帰る家がある
蛸や夜勤の母が出てゆけり
うつし世とあの世の間かなかな
噴煙の名残りのやうな秋の雲
逢ひたき人は遠き人なり秋の雲

月 今宵 西山 貴美子

古びし句 服部 みどり

しろがねの銚ち傾ろりけ月今宵
月今宵言の葉種くまのひとしきり
天啓のごとくにこぼれ金木屋
雁渡し秘色の法衣風孕み
登高や御納戸色の地平線

秋風が吹く蛸壺の呆け口
後の月句を語るには遠すぎて
蓑虫がたれ瞬かぬ神の牛
こほろぎに鳴かれ一と夜で古びし句
案山子はや土間に寝かされ十三夜

そばの花 波多野 寿子

有馬 筆 星野 和葉

青白く泡立つてをりそばの花
広すぎる部屋にぼつんと野紺菊
細く描き秋思の眉となりにつり
長き夜のすさびに捲る夢二の絵
秋ざくら紺の夕山迫りくる

有馬筆は箱入り娘かな女の忌
秋涼の畳に座せば祖師の影
こぼれ萩風に遊ばれ無縁墓
秋鯖の塩焼き食うて気は若狭
水攻めのありし川辺に萩長けり

丸丸と 茂木和子

秋夕焼 矢作水尾

秋の蚊の日中に出でて打たれけり
残る蚊の以外と早き逃げ脚よ
あぶれ蚊の三匹三様この腕に
残る蚊の縞丸丸と太りたる
執念の一刺しか秋の蚊の消ゆ

大楠の樹齡千年秋夕焼
川底に砂の起伏や水の秋
秩父嶺に雲湧く忌日秋暑し
絶妙の一手をくらひ秋扇
黒々と切立つ古城雨月かな

(順送り)

虫の夜 森 千代子

わが影にはつと戦く虫時雨
死後の事考へてゐる虫の夜
催眠術にかかりたい様な虫の夜
受話器置く嫉むが如く虫の声
旅枕ふと耳にする鉦叩き

☆

☆

季音月

十三夜

藤澤喜久

尼五山いよ臆長けし十三夜
ただちや豆いろよく茹でて十三夜
ゑのころ草系譜迎ればユーラシア
湯治宿異国のおかみつくつくし
野仏の幽かな笑みや秋夕焼

萩の風

故吉澤純枝

ひと叢は園の要に紅の萩
万葉の風姿を今に宮城野萩
受け継ぎし宮城野萩の気品かな
萩の風写経の袖をたくしあぐ
霧深し朝の牛乳棒飲みに

月今宵

渡辺舍人

水切の礫^し彼岸まで蜻蛉も
落蟬やいのち透かして見るかたち
寝かす手の間合ひねむたし小鳥来る
老いらくにこそその初恋夢二の忌
月今宵遠くとほくに思ひ人

五十回忌

柚木治子

忌を修すかな女句碑より秋の声
慈悲深き遺影むらさきかな女の忌
曼珠沙華あたりを祓ふかな女句碑
母想ふかたみの一句秋扇
星月夜耀変茶碗さながらに

庭に秋

荒井俱子

折紙の鶴ふくらます秋の夜
斜め癖つきし墨する秋の夜
絵手紙に色さす筆や虫時雨
跳ぬるもの鳴くものもをり庭に秋
碑を囲む草にすだきし昼の虫

秋涼 森田祥絵

小便小僧も浮かれ気分の祭笠
新涼の川輝きて水速し
秋涼や少し淫らな松の脂
シスターのベールに揺るる秋ざくら
十三夜明日へ氣息の絵筆置く

栗おこは 宇田白鷺

大津絵の徳利で注げば稲妻す
朝寒や今日やる事の指を折る
朝寒や畑の菜つ葉シヤキと立つ
薄寒や三つほど買ひぬパラゾール
売切れの札恨めしき栗おこは

湖国 鳥羽和風

秋風や松も杖つく浮御堂
義仲寺の山門揺らす芭蕉の葉
無名庵秋とりどりの幕の内
義仲寺に一句を残す蚊の名残
吟行の納めは湖畔子持鮎

坪の桔梗 丸山マスマ

したたかなる秋の蚊の針哀れとも
大甕に秋草繚乱カフエテラス
重陽や八十路を節たぐのクラス会
吹き替への役者あつぱれ村芝居
掛字替へ坪の桔梗の風通す

青き筋 松本光子

振れば鳴る財布の根付秋鯖買ふ
秋鯖や背に一本の青き筋
蟬しぐれ山磨かれて水旨し
大揺れの萩に畦道塞がるる
研ぎ上げし農具一列萩そよぐ

古酒の酔 池田雅夫

古城址に伏する小草よ秋の風
蒼天の北の大地や馬肥ゆる
栗飯や育ちざかりのてんこ盛り
哀楽の三軒長屋古酒の酔
燃え盛る残照の雲秋惜しむ

来し方 井上燈女

来し方をたぐる百歳敬老日
菊の香を胸に抱きて兄百寿
大藁屋奥へ奥へと月明り
法師蟬律儀に鳴きて声終る
青淵の論語の素読秋深む

秋 暑 十倉和子

秋暑し推されて応援団長に
大男ばかりと秋暑のエレベーター
土べつたりお相撲さんの背の秋暑
巨頭^{こゝど}鯨追ひ込む湾の秋暑かな
海峡向く火炮の台座ばつた跳ぶ

秋の声 田寺玲子

幽霊飴購ふ残暑の五条坂
タンカーの遅遅と残暑の沖をゆく
柿衛のばせうの軸や秋の声
野路菊や風蕭蕭と潮仏
子等の追ふ露風の里の赤とんぼ

残 暑 森本早苗

秋雷の小言を食らふ二百分
大津絵の鬼もべそかく残暑かな
推敲の脳にやさしき鉦叩
御仏飯令和初物零余子飯
手折り来し野菊添へたる忌日かな

秋 彼岸 高島寛治

秋の蚊と共に降りたる終電車
全集の順序を正す秋の夜
講釈をさんざ聞かされ走り蕎麦
今わかる母の心や秋彼岸
波音の闇に紛るる星月夜

常温酒 小倉倭子

敗戦日明くれば紫黄十三回忌
文月や常温酒で献盃を
想ひ出のテネシーワルツを月見草
童謡の文語ゆかしき秋コンサート
わが俳道ここまできたら吊しのぶ

しんちぢり

霜中冬至

存念は朱の中にあり溪の柿
人減つて富有柿のたわわなる
笛の音や鎮守の杜のうそ寒し
かたくなに意地張る男新松子
傷ついて癒す言葉も秋の草

ダイヤモンド富士

中尾笑子

東の間のダイヤモンド富士縮とべり
夜這星心の奥を盗まるる
ぐい呑のちろりのひかり月中天
名月や人もけものも優しくて
葉鶏頭蔵の利き酒腹にしむ

芒原

川崎道子

試歩の道約束のごと曼珠沙華
熊除けに鳴らす錫杖霧の中
芒原雑兵あまた潜みしか
芒原ふと空耳の鬨の声
秋天へ登る梯子の裾支へ

秋の天

井関礼子

里人の鎌持ち集ふ厄日かな
青藜風に重さを委ねけり
紛れなき地軸の自転秋の天
己が影追ふが如くに秋茜
故郷も疎遠となりて月仰ぐ

新涼

川野妙子

新涼や句友集ひて昼食会
新涼の窓いつぱいに開く朝
健診の終へ新涼の風の中
台風の近づきくるか樹々騒ぐ
台風の爪痕残る家畠

曼珠沙華

加藤むら子

人口の減少続く秋の町
遊具殖ゆ公園子等と群とんぼ
曼珠沙華ちらほら水車円満に
延延と一本の道芒原
若者の声の弾める月見酒

十三夜 岡野 順子

防災のリユック身近に十三夜
ひぐらしやこの苑に防災格納庫
汲み置きの水確かむる十三夜
十三夜電線の揺れ飽かず見る
予定表びつしりつまる残暑かな

秋夕焼 内田 恵子

秋鯖や手造りの皿重くあり
ファストよりスローフードを新豆腐
厩から首伸ばす馬 秋夕焼
秋夕焼野に置き忘る抱人形
がさがさと駄菓子の袋月上る

☆ ☆

俳句

11月号 予告
10月25日発売
予価(本体945円+税)

特別作品 西村和子・深見けん二・津川絵理子

石田波郷の魅力

大特集

- ▼特別インタビュー「波郷の素顔」……石田修大 インタビュー……小野あらた
- ▼波郷句鑑賞「鶴の眼」から『酒中花以後』まで
- ▼石田波郷略年譜……鈴木しげを
- ▼波郷のことは……大石悦子
- ▼波郷の思い出……矢島渚男・徳田千鶴子

第65回 角川俳句賞発表!

受賞作 「玉虫」50句……西村麒麟
「鷺に朝日」50句……抜井諒一

受賞のことは/選考座談会/候補作品13篇
選考委員 仁平勝・正木ゆう子・小澤實・岸本尚毅

俳句クロニクル(後編)……友岡子郷

付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 冬・新年

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。
発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

ぼんのくぼ

田中千穂

きららかな色衣に孕む秋の風
秋の晴僧一列にぼんのくぼ
遠距離の恋はおしまひ十三夜
枝豆やあなた好み塩加減
夜をこめて肌にしみたる白露かな

十三夜

大場順子

鯨の尾の反り美しき十三夜
研ぎ上がる刃文きりりと花桔梗
走り蕎麦水音回す佐久郡
外つ国へ子の去るデツキ秋夕焼
秋の夜母に習ひし針仕事

竹の春

森川義子

竹一幹雨月の庭に反り返る
風鐸に千年の鏝竹の春
小流れの厨へ続く水の秋
古ミシン今つれづれに秋灯下
古書店の「奥の細道」秋灯下

御紋章

山田美佐尾

秋の海千尋の底に御紋章
雨月かな玉虫厨子の奥の院
所作きりり風の盆とや水の秋
秋灯下磨る奈良墨の匂かな
カレー粉のスパイス利かぬ秋暑し

天の川

松宮保人

裏年の胡瓜貰ひてお裾分け
細波や銀河も海も暗闇へ
萬年の先祖は一つ天の川
老松に良夜の明かりもれ出づる
秋草に埋もれる駅の客を待つ

体たらく 原田 想子

水に棲み水に潜れぬ水馬
揺るるたび一筋ひかる蜘蛛の糸
かに缶をコキリとあけて今年米
一皮を脱ぎ一節の今年竹
秋めくや鳴かず飛ばずの体たらく

あなかしこ 梅澤 佐江

宮島をさながら映し秋の水
月の雨遣らずの雨となる夕べ
爽やかに千鳥格子のパンタロン
潇洒なる籠に銀座の月鈴子
十六夜や文の結びはあなかしこ

穴まどひ 野口 和子

生あれば兜太百歳鱚雲
石つぶて受けて草むら穴まどひ
紅さして辛味程よし新生姜
かなかなに背なを押しされて帰途の人
別住みの子等が頼りと葡萄園

秋来ぬと 井口 俊晴

雑踏の地熱奪ひて初嵐
名月や仔犬はそつぽ向きしまま
婚殿は古里自慢芋を煮る
鯛焼く鬼が逃げだす煙かな
日に百回真剣振りて生身魂

秋の声 井上 玲子

黒々と鎮もる富岳秋夕焼
洪鐘や火伏の山の秋夕焼
星月夜旅愁いざなふ津軽三味
最果ての沖に漁火星月夜
行く雲の影おく池塘秋の声

吾いま独り 加藤 草太郎

雲ふたつ軽く浮かべて秋涼し
堅物の堅さを通す榎櫃の実
指先を見詰むるだけの夜長かな
介添の妻が差し出す秋の水
すがれ虫吾いま独りひとりなく

秋の空

鈴木みや

園児等の指が足りない赤とんぼ
長き夜の独り笑ひや古日記
主婦の座をわたせば軽し萩の花
部活の娘百円シヨップの秋を買ふ
言ひちがひ聞きちがひする秋の空

赤とんぼ

宮崎雅訓

登校の列に加はり赤とんぼ
赤とんぼ始業軽やか鐘の鳴り
給食に興味津津赤とんぼ
赤とんぼ遊び盛りや昼休み
下校時やいづこへ帰る赤とんぼ

菊の日

野平美紗子

菊の日や快気祝の小盃
吹かれる夕日を揺らす秋簾
運動会吹奏楽を風に乘せ
午後の眠り誘ふオブジェや秋うらら
望郷の列車の音や菊日和

花芒

松山清子

この峠越えし皇子見ゆ花芒
源流を尋ぬる旅や花芒
君の背の何処に失せぬ芒原
ダブルリンの話聞き入る秋の夜
秋の夜やホームの端にひとり居て

女文字

秋山冷子

秋蚕飼ふ御朱印稀に女文字
案内の僧の先行く大揚羽
落蟬の一声闇を深くせり
採血す先にコスモス抱きし腕
ドローン旋回ひなげし情緒不安定

月見酒

西浦千枝子

カーナビも知らぬ此の道蚯蚓鳴く
稲刈機とベントの並ぶ一軒屋
此処よりは山岳地带新松子
隣の客に耳すます犬星月夜
柚小屋で爺さま二人月見酒

秋の街 松井 由紀子

薄き陽や僧形の立つ秋の街
行列の先に饅頭秋の街
秋の街しづけさ溜まる裏通り
秋湿よくぞ戻りし呆け猫
混声のひびき調ふ秋の昼

秋の雲 菅原 知子

仏前の子等鬼灯を鳴らし見せ
盂蘭盆会见よう見まねに御霊おり供膳くぜん
「かな」と鳴き「かなかな」と声後の黙
ジグソーパズルの最後の一枚鱗雲
退職の夫に寄り添ひ秋の雲

永久齒 福田 千春

案ずれば吾案じられ生身魂
紅さすと弁活気づき生身魂
永久齒大事に使ひ生身魂
過疎の村おほふ鱚雲大漁
山門の寄進に父の名ちちる鳴く

野路菊 上戸 千津子

野路菊の風つなぎゆく小径かな
稲雀見ええず退鳥音波でも
去ぬ燕を見つつ幾年磨崖仏
届かぬ手を口開け笑ふ蔓通草
鳴き響む日は去りいつか虫の声

揚花火 中野 疆

海しづか白き遊具に晩夏光
連絡船秋思の波を残しつつ
昇る散る同じ間合ひよ揚花火
海花火誕生祝ひの二尺玉
花火会ファイナーレ海に灯を残す

渡し舟 福田 藤十郎

旗振れば渡し舟くる水の秋
秋の水原爆ドームの裾流る
児等を連れ「ドーム」を見せる原爆忌
海底に眠る軍艦秋暑し
白狼に螢百匹戦あるな

常夜燈 矢島 清

人生の折れ線グラフ蝗とぶ
往還の鎌倉古道熟柿かな
水音の透けてをりたる谷紅葉
常夜燈たつぷり濡れて雁渡し
八月やみんな平成方を向く

赤とんぼ 後藤 綾子

石地藏並ぶ街道赤とんぼ
声明の様な風音秋の草
いたづらに句歴重ねて秋の草
持寄りて長寿のはなし栗おこは
満月の上り霊峰現れぬ

☆ ☆

特集 没後五十年 石田波郷

巻頭作品10句

宇多喜代子・加古宗也・佐藤麻績
高野ムツオ・西嶋あさ子・檜山哲彦
間中恵美子・山口昭男

俳壇 11月号

10月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
中西夕紀

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句II……大島雄作・奥名春江

俳壇史エピソード……坂口昌弘
続・日本の樹木……広渡敬雄
俳句における「写生」の周辺……栗林 浩
近代女性俳人伝……坂本宮尾

特別寄稿 五所平之助の俳句……谷岡健彦

俳壇時評……松下カロ／俳壇月評……しなだしん

俳句と随想12か月 はりまだいすけ・江崎紀和子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

俳誌望見 梅澤 佐江

〔癩祭〕 令和元年八月号 通巻一〇五〇号

主宰 本田攝子 発行所 東京都葛飾区

大正一四年八月、吉田冬葉が東京で創刊。師系大須賀乙字。「悠
久の宇宙間に限りある人生の存在感と生活の哀歎を詠む」を理念と
する。(月刊)。(二〇一九年俳句年鑑より)

森羅万象の中の風景を描いた表紙、頁を繰ると表紙裏に歴
代主宰六名の句が道標のように掲げられている。

主宰句「身ほとり」一二句より五句紹介。

揺れうごく少女のころ江戸風鈴

下町の気安さに馴れ青すだれ

虹立つや小さき希ひを声高に

あへぎ来て己れ小さき滝の前

しのばずの池暮れなつむ浮巢かな

下町情緒や開放感の中で、身ほとりの人々や生きものへの
慈しみ、軽妙洒脱さや深い洞察と研ぎ澄まされた精神性に私
淑する。

霜声集 同人 一〇〇名 主宰選より八句紹介。

暁や風鈴の韻耳たぶに

忘れ得ぬ令和五月の熱海の夜

青葉風男の子生るとメール来る

桑の実やどの子も唇をむらさきに

川瀬 碧水

伊東 八峰

奥田美代子

梅村 半醒

改元の海盛り上げて青岬 濱之上九紫
葉先にも気概凜たり白牡丹 平譯 敏子
青臭き風巻き上げて草刈機 平谷つよし
納骨を終へし安堵や蛩舞ふ 石田 玲子
紛れもなく自身がそこに存在しており、命の輝きと生活の
哀歎を余まずとこなく詠まれている。

癩祭俳句(雑詠) 一五九名 主宰選より八句紹介

青葉城水の底まで緑さす

夏めくや街並白くなりにけり

甘味家に屯してゐる祭り髪

釘ひとつ外して開く街薄暑

梅雨空に光る星あり友の逝く

黄昏や風鈴しばし力抜く

素朴なる南吉の碑やかたつむり

緑蔭に寄せて客待つ人力車

鋭い観察による感性豊かな描写、自身の皮膚感覚と哀歎の
瑞瑞しい描写に心惹かれた。

平成三一年度癩祭賞・新人賞及び選後評、第四〇回癩祭全
国大会・特定選者三光選句及び選評、栗村勝美編集長による

「主宰秀句」鑑賞、受贈俳誌鑑賞・栗村勝美氏、課題句「桐一葉」
を月替り主要同人・赤木ふみを氏選、拾遺短評・伊東八峰氏、

吟行記等大いに楽しみ学ばせていただいた。

『癩祭』の如く、歳時記、広辞苑、古語辞典、語彙ノート
等を広げ散らかして作句に勤しまなければと今更のように身
に沁みて感じている。

梅村 半醒

平谷つよし

仲村江以子

山口 博生

風間 緑

松本 妙子

山崎 泰右

佐々木美奈子

現代俳句鑑賞

網野月を

桝咲くや星糞掘りし跡凹ぼこ

矢島 渚男

〔俳壇〕九月号・石ばかりより

上五の「桝」はバラ科リング属でリングやナシに似ていることからリングともコナシとも呼ばれる。花期はおおよそ四月から六月であるから、長野県の山間では初夏に咲く花であるうか。前詞に「星糞峠」とある。「星糞」とは黒曜石の事である。この地は伊豆七島の神津島と並んで、縄文時代からの黒曜石の産地であった。鋭利な刃物に加工されたり、鏃となったりしたようだ。野生種である「桝」と縄文まで時代を遡る黒曜石の取合せに絶妙な感性が滲み出ている。遺跡なども保存されているようであるが、句では諄々と表現せずに「跡凹ぼこ」としたところに俳味がある。

白日傘振り向けばみな遠くして

雨宮きぬよ

〔俳壇〕九月号・私の自由時間より

中七座五の言い回しは、空間的にも用いられるし、時間的にも用いることが出来る。句に合わせて「ゆっくり歩いて」というエッセイが添えられている。

所属されていた結社「万蕾」が解散して、著者は「百燈」

を興された。多忙を極めたと述懐されている。同時期には近親の方々の介護もされて、今はその介護も終えられたご様子である。とすれば、中七座五の意味は自ずと時間的に用いられたものであることが知れる。座五の「みな遠くして」に思いの深さが表現されている。

声甘く秋の蚊がくる夜の稿

洪川 京子

〔俳壇〕九月号・夜の稿より

夜、句稿を温めていると「秋の蚊」が「甘」い羽音を立てているのが聞こえて来た、と筆者は解釈した。本来、蚊の羽音くらい鬱陶しくて、煩わしいものはない。寝入りに聞いたりと眠気が何処かへ行ってしまうこともしばしばである。それを作者は「甘く」と解しているのだ。蚊への思い遣りが、「秋の蚊」だからこそ生きている。座五の「夜の稿」の省略の効いた表現は絶品である。

献体番号負ひし余生や緑摘む

加畑 霜子

〔俳句四季〕九月号・献体番号より

句集「献体」中の一句である。誌には抜粋されて掲載されている。作者の第四句集ということである。上五と中七の句

意は現代社会のシリアスな側面を伝えているように読めるのだが、座五の「緑摘む」の季語の働きから、「負」ふことを決してネガティブに受け止めていないことが判る。手練れの句作りである。

夏の夜の耳の後ろに道のあり

北川 美美

〔俳句四季〕九月号・Y子忘り)

高村光太郎の「道程」を連想した。新雪をスキーで滑降する時の景の様だ。ただ道が出来るのではなくて、座五「……のあり」であるから、ロマン主義的自己積極性を詠んでいるのではないだろう。中七の「耳の後ろに」という表現は体の一部を用いていて、この箇所オリジナリティーが在る。上の「夏の夜の」はいかにも怖い話になっている。

ことごとく未踏なりけり冬の星

高柳 克弘

〔俳句界〕九月号・列聖より)

「冬の星」は無論すべて未踏なのである。ただ中七の「……けり」で気持ち良く切れているので、人の業が「ことごとく未踏」のようにも読めるのである。寧ろその方が座五の季語「冬の星」が活きて来るのではないだろうか。

秋暑くまとはる言葉拭くタオル

伊藤 昌子

〔俳句界〕九月号・交差点より)

諧謔の効いた句である。名人と言われる嘶家がクスグリに言っている洒落の様だ。それにしてもこのタオルは随分と

珍しいタオルである。

何もかも忘れめでたし生身魂

蘭草 慶子

〔俳句〕九月号・何もかもより)

介護をテーマとする句は、昨今多く見かけるのだが、「めでたし」と言い切って、「生身魂」ご自身の立場になっての断定が何とも気持ち良い。中七の「めでたし」はお伽噺のそれのようにも考えられる。中七の終止形で切れを作っているのだが、意味的には座五の季語「生身魂」の事と解すことが出来る。

百年は世紀のことよ岩に竜胆

田中 亜美

〔俳句〕九月号・竜胆より)

一般的には一世紀は百年ということになり、〇一年から〇〇年までなのであるが、作者は百年を世紀と捉えている。筆者は歴史学を学ぶものなので、先ずはこの個性的な把握の仕方に捕まってしまった。そして中七に置かれた「よ」と、滅多に見ることは出来ないだろう「岩に」咲く「竜胆」である。何か百年に一人の天才を称えている様にも読める。他に産土と漂泊の間霧霧迅し

妻恋のおほかみ霧に和らぐよ

狼の山の頂上碓星

などがある。「産土」「おほかみ」「狼」とくると作者の師を思ってしまう。この連作は、もしかしたら師へのオマージュなのかも知れない。

金の鈴銀の鈴

◆季音九月

町野広子

蚊に済まぬ老の血なるを恥づかしく

吉住 光弥

大ベテランの光弥さんのこの一句に、思わず笑ってしまつた。蚊と見れば何の躊躇もなく叩き殺すのが世の常と思つていたが、作者は蚊の生命をも思いやり、自らを老いの血と言いつ放ち、蚊に対して申し訳なさと恥づかしさを感じた。

ユーモアとウィットの利いた御句。他に「ごきぶりの二句あり、身近の生き物への観察と心情に感服。」

工場の鉄切る音や青田風

栢尾さく子

鉄の匂い、工場の音、青田そして渡つて来る風。人間の感覚を充分に刺激する一句。筆者の記憶の中でも、鉄工所は町の外れにあった。辺りには田畑が広がり大きな音も迷惑を掛けない。古き良き時代であった。しかし今では、田畑がほとんど住宅となり、元々あった工場の方が居づらくなる。畜産を生業とされる方々も同じ経験をされているのかも。

水を打つ他家の内紛聞き流し

菊池ひろこ

夏の夕玄関の辺りに打水をする。昼間の熱気が沈まり、本

人は勿論、往來の人々にも涼を与える。家の混んでいる街中では近隣の様子が聞こえて来る。掲句の内紛は決して深刻なものではなく、親子、兄弟のいつもの言葉の交換のような物であろうと思う。淡淡と水を打ちながら、漏れ聞こえてくる声を聞き流す。下五が水に流すに通じる。

夏落葉お化け出さうな鎮守さま

椎野美代子

掃き寄せる母の寝嵩の夏落葉

常緑と思われている木も秋を待たずに古葉を落とすのであるが、一句目薄暗い鎮守の森は、鬱葱としているからこそその品格風格ではあるが、子供心には恐いものである。

二句目老いて小さくなった母の寝嵩に例えた夏落葉。掲句は季語が動かず、夏の終りの寂しさも伝わる。

三伏のぐつと飲みこむ陀羅尼助

中尾 笑子

元々陀羅尼を誦する時に睡魔を防ぐ為僧侶が口に含んだ苦味薬で、現在では腹痛用にと高野山などで作られている。筆者はテレビの遊番組でつい最近その存在を知った。「良薬口に苦し」は本当らしい。一気に呑み込み極暑を乗り切るので

ある。「だらにすけ」一度聞いたら忘れない。

あやとりの川より覗く夏の雲 松本 光子

母から子へ、姉から妹へと教わり輪にした糸で様々な形を作る遊び。先ずは基本の川。初めてのおやとりで川の形の糸の間から覗いた夏の雲を、少女は忘れないうであらう。もしかしてこの少女は、作者自身であったのかも。

枇杷二つ白磁の皿の影は青 内田 恵子

水明の表紙画を描かれている恵子さん。美的感覚は一流。掲句も正に一枚の画を見ている様である。枇杷の黄橙色。白い皿、影の色、他に窓からの光やテーブル掛の色などにも思いが広がる。中でも影の色を青とした処が並ではない。さあ、描いたあとは美味しい枇杷を戴きましよう。

側室の墓は小振りに梅雨寒し 川崎 道子
朝ぐもり小抽斗より母子手帳

二句共になぜか心が静かになる。一句目華やかな権力の中の生涯であっても、側室という立場の物悲しさが、辺りに比べて小振りな墓に表われている。二句目母と子の生命の記録でもある母子手帳の存在が、この句を揺るぎない物としている。小抽斗も庶民的で好感が持てる。

買ひ来たる少し色濃き夏帽子 中野 疆

夏帽子と言えば麦稈帽、パナマ帽を思い浮かべる。作者は少し濃い色が気に入って購入した。それから際するにそれは

外出用のパナマ帽であろう。夏用のスーツと帽子を着用したダンディな作者の姿が目につかぶ。

星涼し湯宿の下駄をつつかけて 福田 千春

星の美しい鄙びた宿に湯上りの身体を持ち出す。素足に宿の下駄をつつかけて一歩出れば、そこには満天の星。声も出ない程の感動を覚える。旅先での一幕をさらりと詠みつつ、下五には余韻を残している。

お近付きにまあ一杯の冷酒かな 梅澤 佐江
五感みな洩れ尽くしたる熱帯夜

豪快で小気味のよい一句。「まあまあ一杯どうぞ。」会の始まりの様子。喉越しの良い冷酒を重ねる内のほてり、初対面の堅苦しさもこの一杯でたちまち打ち解ける。大人同士の付き合い合とはこんなものであり、酒席での和やかな様子が伝わってくる。二句目これ又大胆に言い切った一句。熱帯夜を詠むに五感の様子を持ち出すとは、しかも洩れ尽くしたと、言われてみれば熱帯夜とは、そんなものである。汗も出尽し何もする気にもならない。作者の発想の豊かさに感服。

桁着丈余りし母の浴衣かな 野平美紗子

ふと思いついて母の浴衣を取り出してみた。これを着ていた母の姿を想い出しつつ袖を通してみると、何と桁も丈も大きすぎる。母はこんなに大きかったのか。ふつくら大柄だった母を想い懐かしさが募る。しみじみ温かい一句。

私の三句

藤澤喜久

ポインセチア一鉢抱き泣きぼくろ

花屋さんの店先ですれ違った少年が、赤い天鵲絨のようなポインセチアを抱えていたので思わず綺麗と云つたら、少年はびっくりして振り向き立ち止まった。「プレゼント？」と聞いたら黙って首を横に振った、とその少年の横顔に小さな泣きぼくろが付いているのが付いた、と云うのも、私の父も娘も孫までも泣きぼくろがあるからなのです。少年ははにかんだ笑みを残して去って行った。私はその後姿にもう逢うことも無い薄い縁を感じていた。父は泣きぼくろは親の縁が薄いと嘆いていたけれど、辞書には涙もろいと書いてありその通りと納得したが、あの少年を引き止めたのは果して赤い天鵲絨のポインセチアだったのか、それとも泣きぼくろだったのかしら…。

青き踏む「子供の間」へ子を放ち

子供がまだ幼かった頃、私が遊びに連れて行ける所といえは程近い「子供の間」でした。「子供の間」は、一九六五年五月五日に、皇太子御成婚記念に恩賜公園として賜ったその頃は遊具を置かない自然のままの森林公園でした。繋いだ手から小馬のように二人の子供は思いっきり駆け出し、転げ、草叢から飛び出す飛蝗や蜻蛉に遊んでもらっていました。こ

の自然こそ全てを受け入れてくれる最高の友達だったので。お腹が空いて芝生に広げた、おむすびには、太陽も風も緑も美味しなお菜なのです。お腹が一杯になると五つ違いの姉弟はよく歌いました。「デイズニールランド」も「スマホ」も無い時代です。遊び疲れた子供を車に乗せて帰る頃はどちらともなく静かになって眠っている様子、花の苔のような想い出は私の心の宝なのです。

ジーンズの着物小粋に梅雨晴間

足腰の壊れた私が、まったく着物を着られなくなつて一年余り過ぎた或る日、娘が街でジーンズの着物を見つけたからこれならお母さんも気楽に着られるかと思つて、と包みを置いて忙しなく帰って行った。畳紙には濃紺のジーンズの着物早速着てみて驚いた。大きい!! 現代人の寸法に昭和一行は泳ぐしかない、おまけに御端折り分まで付いている。娘から「どうだった」と云う電話に、どっこい、どっこい、と答えるしかなかった。逸速く気付いた娘が興味津々駆け付けて、「お母さん四股踏んで」と云うから「生憎足腰を痛めまして休場中のごんす」と答え笑いこぼれた。それにしても主人の留守中で本当によかった。後日テレビで女優の羊さん、彼のジーンズの着物を物の見事に着こなしているではありませんか、せめて私ジーンズの着物の句をと思ひ至つた次第です。

私の三句

荒井 俱子

挽歌ともピルの狭間の虎落笛

友人の付添いでさいたま新都心駅近くにあるさいたま赤十字病院に向うため改札口を抜け、けやき広場方面に歩を進めた。広場の界限には、さいたまスーパードリーナもあり、高層ビル等も林立し正に都心そのものである。

その日は木枯が吹き荒びビルに烈風が吹きつけてヒューヒューとなり笛のような音を発していた。その笛の音は、わずか二ヶ月間の入院で逝去なされた、前主宰への哀傷歌のように心に沁みだ。

山茶花や忽と逝きたる師が恋し

俱子

子の耳に遊ぶ後れ毛街薄暑

五月の風がすがすがしいある日趣味の吹き矢教室に行くため友人と待合せをしていた。約束の時間より早く着いたので友人はまだ着いておらず駅頭で待つ事にした。

吹く風は肌をやさしく、待ち時間も苦にならない。何か匂種はないかと、あたりをキョロキョロ。しかし句になるようなものは何も見つからない。ふと気がつく祖母らしき人と

女の子の二人連れが人を待っている様子、子供も孫も女の子が居ない私はこの二人が羨ましく二人の楽しげな仕事や孫を見守る祖母の目差を、それとなく眺めていた。ときたま吹く風が少女の後れ毛と戯れて何とも風情のあるひと時であった。三つ編の少女の項夏めぐり

俱子

栄転も左遷もなく金魚飼ふ

近所のM邸、オーブンガーデンにして花樹や、花は無論の事水槽を数多並べて金魚を飼育している。飼主は六〇代後半から七〇代前半と思われる。

水槽には金魚の基本形とされる「ワキン」を始め背鰭を欠く「ランチュウ」。尾や鰭が長く美しい「リュウキン」。眼球が左右に突出している「デメキン」と種類も様々で近所の幼子や小学生等人々の目を楽しませている。

ある日句会で「金魚」と言う兼題が出された。その時閃めいたのがこの飼主の事である。長いサラリーマン生活にピリオドを打って自由の身になったので金魚を飼育する事にしたと以前語ってくれた事を思いだしたからだ。しかし左遷もなくと勝手に表現した事。自責の念に駆られている…。

新入りの金魚令和と名付けたり

俱子

私の三句

池田雅夫

思ったこと、感じたことを素直に詠みなさいと言われるが、

ただそれだけでは俳句にならないことが多い。ではどうしたらいいのだろうか。それにはやはり基本がだいじであろう。

まずは自然観察。幸いに、埼玉県は自然に恵まれている。四季折々の花々、山や川、森、神社仏閣と、枚挙に遑がない。

私の場合、生まれ育った新潟の自然、そして農事などの体験を基に作句を心掛けてきた。農耕民族と言われる日本、その国土の大半が山林で、耕作地は国土のおよそ三分の一ほどにすぎない。その狭い耕作地で一億人以上の食料を賄うことができず、外国のものに頼るしかない。

島国の狭きを深く耕せり

農事に限らず、春夏秋冬の自然、暮らしにも注目し、花鳥諷詠を念頭に置く基本重視を第一段階とするならば、次の第二段階は日常生活の喜怒哀楽を詠むことに目標を定める。歳時記を片手に頭をひねる日々を重ね、その姿勢は現在も変わらない。季語のもつ意味、力を把握することが重要であると同時に、一つの言葉の力も重要な役割を果たすこともある。日常といっても、やはり昔の風習、暮らしぶりからは離れ難く、現在の暮らしでは稀になった言葉や行動を詠むことが多

いのが現状である。

拾着て二つ返事の楽天家

「水明」の理念である『皮膚感覚で風土性豊かな俳句』を新たな目標としてはいるが、おとなしい俳句の域を越えられず、殻を破ることの難しさを痛感している。これまで口にしてきた「冒険」が思うようにできない。俳句の作り方に工夫が必要なのではないかと思ひ、試行錯誤を繰り返している。俳句は、読んで楽しむ、書いて楽しむなど、その魅力は多岐にわたる。名句、佳句のリズム、韻律を感じとる、あるいはまねてみるのもよい。表記では、漢字、ひらがなの使い分けで受ける感覚が異なってくる。発想の転換、連想の変移、同義語、類似語の活用など、推敲の手段は多様で、一句が完成するまでの過程を楽しむことも永く俳句を続ける秘訣の一つであると思う。マンネリを打開するための破調もいだろう。自身の特徴をしっかりと捉えた上で、新しいもの、ときには自分らしくないものにも挑戦することが今後の課題であると認識している。

異国へのC滑走路陽炎へる

山本鬼之介 選



さいたま 日高 徹

天井にドスンと蛇の落ちし夜
葉柳がお七隠してゐたるかな
カルタゴの海の青さよ花石榴
落苦し高校生で逝きし友
墓父迎ふると鎮座せり

行田 近藤 徹平

海霧深し生まれ故郷は今他国
雷鳥や断崖のぞむ遭難碑
鉢形城にしのお戦国夏の川
額縁にをさむる従兄孟蘭盆会
山水に替ふる掛軸涼新た

さいたま 保坂 翔太

薄絹の翅震はせて秋茜
丹念にネクタイ選ぶ秋初め
ふくよかな埴輪の肩に秋茜
覇者いづこ墳丘わたる秋の風
秋風に諸手を翳す埴輪かな

高崎 原田 秀子

アザインの聞こゆる晩夏流離ひぬ
地ビールや琥珀の底のメランコリー
女なべて喉うるはしくビール干す
ピアガーデン上司の席を疎みけり
母に見え父には見えぬ日雷

水を吸ふ土の声聴く秋はじめ
茜射す故郷の山赤とんぼ
新盆や心尽しの手料理を
秋の風牛の睫が反りかへる
何事もなきは幸せ八月過ぐ

熊谷 越田 栄子

秋暑し団塊世代練り歩く

校庭の鉄棒の錆秋暑し

道標の文字の掠れや秋暑し

流木のオブジェに芒浜のカフェ

カフェの灯が消えて岬の星明り

川口 野田 静香

原爆忌胡座の上の平和かな
始まりは「とりあへず」と言ふビールかな

さいたま 青木 鶴城

登頂や天にも昇る缶ビール

急登の靴の軽さや秋の蝉

秋晴や托鉢僧の立ち姿

香ること忘れて美しき花水

赤とんぼ母の干し竿低きまま

つういつい風に遊べり赤とんぼ

なめらかなる沼のゑくぼにあめんぼう

孟蘭盆会寡黙な兄がうどん打つ

鴻巣 大塚 茂子

ビール酌む粋な主のホームバー
夏痩せを誰も気付かぬ太さかな

東京 太田 絹映

あれもこれもと供物溢るる盆迎へ

四本の足の不具合茄子の馬

精霊舟見送る此の世の私かな

片かげり妻のあとゆく齡人

とりあへず辺り見まはすサングラス

呼び止めてすぐ追ひ立つる行行子

禰宜の手が虫をよけをり夏祓

夏瘦に形くづれぬシャツを着て

さいたま 曲淵 徹雄

廃屋と思しき庭の枇杷たわわ
西日差す齒科の冷房キンキンに

さいたま 加藤でん治

大西日スコアボードは五対四

朝顔の藍の深さの生命かな

秋夕焼婆の笑顔と丸き背

八月やキノコ雲かと西の空

表札に残る父の名夏の暮

さちさちの勲章胸に勝つて泣け

絵手紙で伝ふる駅舎吾亦紅

陽の落ちて影絵となりぬ芒原

渋谷きいち

手花火は幼き胸に焼き残し
剥落の墓石の哀れ盆供養

田中 章嘉

墓碑を読み想ひ出新た盆供養

秋風の吹き寄る「むつ」の恐山

秋暑し宿の帯解く影法師

黙祷の多き八月移りゆく
跳んで跳んでとんで飛蝗が草と化す
強面の飛蝗の縞の腹やはし
伝へたき言の葉あまた吊忍
星月夜貧しき国の頭上にも

さいたま 新 曆文

秋立つや土産物屋に投句箱
減反の拵がる村や赤まんま
デュエットは昭和の艶歌酔芙蓉
新涼や板間になじむ足の裏
表札は変体仮名や紅芙蓉

さいたま 染谷 正信

露天風呂で庄助もどき朝ビール
ビール少々白寿の姉の童女顔
初秋や後れ毛なでて風に行く
弁当に一品ふやす秋はじめ
散歩道行きもかへりも桐一葉

草加 河野はるみ

糸とんぼ水面を渡る風の音
大旱の嵌め絵の如き休耕田
蝸牛まだ濡れてゐる木のベンチ
蝸牛己が殻とて重たき日
夏空へ塔の相輪聳え立つ

若狭 山崎 郁子

若僧の白き素足や廻廊拭く
自転車の乙女の素足透きとほる
路地裏に風の素通る初秋かな
赤とんぼ赤を供ふる仏みち
雨戸繰る初秋の風の清すがし

熊谷 神田 治江

噴水や闘志ふたたび湧き出づる
迂回路も崖崩れして合歡の花
蚊一匹盾あげて追ふ大男
和を以て疲れありあり夏祭
花火待つ腰掛石のまだ熱く

上尾 横山 君夫

踊り子の月まで伸びむ指の先
フイナーレは秩父音頭で踊り果つ
曲り家に鳴く牛をらず盆の月
野地蔵の供花となりたる赤のまま
赤のまま鉄橋過ぐる貨車の音

さいたま 笹本 啓子

青空を歡喜の色に百日紅
沖繩の激戦跡やカンナ炎ゆ
驟雨来て天地の塵を流しけり
上枝より命の限り法師蟬
仰向けるを変へられ去りぬ秋の蟬

さいたま 宮崎チアキ

爪を噛む癖は治らず寝冷の子
飛魚や機体眩しき羽田沖
白亜紀を語る化石や草の絮
ビクターの犬の秋思や蚤の市
ペン先の撓る筆圧姫胡桃

さいたま 大槻 瑤蘭

望郷に常に出て来る赤のまま
曉闇に甘き香匂ふ新豆腐
日傘させば体の中を風通る
天井の隙間を狙ふはたした神
次つぎと生まれる水輪あめんぼう

さいたま 西幅 公子

合唱を背に蛸の独唱す
盆踊むかし大切だつたもの
足首の傷をかばひて踊の輪
交番の反旗うなだれ終戦日
秋の雲息するやうにふくらみぬ

東京 石川 理恵

濃緑の中に胡瓜のかくれんぼ
百足虫出づ生け捕りにする油瓶
天花粉や役者のやうな顔出来る
遠慮する事を知らざる秋扇
秋めくや浜にぼつんと人の影

若狭 飛永 鼓

町起しの熱き思ひと地ビールと
口髭の似合ふあなたとビヤホール
スマホの子傘さしかけて蝸牛
空蟬や何事もなき七日間
廃校にあの顔この顔盆休み

石田 慶子

夏座敷夜をサワサワと屋敷蛇
山の畑西瓜ずしりと手渡され
野分中ゆきつ戻りつ伽耶の駅
くれなるの鳴門海峡葉月潮
どぜう汁一先づ酒に泳がせて

伊予 向井 章子

美人画の葉をもらふ夜の秋
大音に花火師の影また動く
墓参り母に聞きたき事ばかり
かなかなの声は音楽カフェテラス
蛸やラジオ体操身にならず

さいたま 橋本 京子

大利根を渡る葬列星月夜
言ひ難きことをさらりと秋扇
髪あげてその手で開く秋扇
人生を流るるままに星月夜
節くれの指にやさしき秋扇

杉戸 佐々木史女

夫入れしコーヒの香やかげろへる

さいたま 伊藤 愛子

推敲の一句まとまり一夜酒

かげろふや一氣に暮るる山の宿

曾孫生れ白桃ほどの重さかな

古稀祝ふ卓に華やく胡蝶蘭

ちちははを乗せし足太茄子の馬

盆用意終へてしばしの正座かな

這ひ這ひの足裏愛しや五蘭盆会

阿羅漢の頭じりじり大西日

タバスコの終の一滴西日さす

森 和子

無住寺に触れ合ふ影や花芒

さいたま 秋本カズ子

八月の淀みの川の朽ち葉かな

芝草に紛るる蟋蟀高く飛び

駒下駄の素足馴染まぬ浴衣

一日花はちきれて咲く朝ぐもり

無縁塚の苔に色さす百日紅

打水や柄杓持つ手の裏千家

客を待つ女将仕上げの水を打つ

勝ち越しの小兵噴き出す玉の汗

車窓打つ夕立横目にスマホ操る

山口 富子

水を打つ椅子八つほどの縄のれん

二拍子の手の波揃ひ阿波踊

飛入りもすぐに馴染みて盆をどり

夕立が洗ふ歩道のタイルの絵

百日紅女性の寿命また伸びて

熊倉千重子

平塚 丸屋 詠子

広島忌家族そろつて黙祷す

墓洗ふ小さき義母の小さき手

秋の蜂飛ぶ壊されし巢の辺り

木から落ち終の動きを秋の蟬

転生を信ずる人や寝待月

表札の掠れし旧家立葵

八月や船団嬉嬉と沖めざす

朝ぐもり大海原に影のなし

店閉めて暖簾降ろせば遠花火

玄関に一升壇の芒かな

川口 田村 節子

さいたま 水野 興二

通院に身にあるだるさ大暑かな

見上ぐれば空に咲きたる立葵

夏風邪にお粥をすすする日となりし

過ぎし日の愚痴のこもりし古扇子

推敲中に眠つてしまふ日の盛り

灰色の海に残暑の大うねり
駄駄捏ねる子を黙らせり大文字
精霊の送り火消えてセレナーデ
火の点くを待てず酒酌む大文字
夜明けからてんでこ盛りの残暑かな

さいたま 藤岡真知子

盆踊やつと覚えし頃終はり
飛び入りでときに膨らむ踊りの輪
踊り果て帰路の背から子らの歌
軽快に播粉木回りとろろ汁
珍しく老母のお代りとろろ汁

さいたま 松田 朋子

棚はまだ撓みを見せず青葡萄
どんつきに入れば片蔭猫休む
少年の姿凜凜しき藍浴衣
さちさちが我家の墓に飛び移る
ばつた跳ぶ野道左右に飛び別けて

新井 孝磨

待つとせう土用鰻の焼けるまで
手料理を誉める子がくる夏休
剃り立ての男のうなじ涼新た
墓参り祖父知らぬ子の小さき手
恙無く厨に立てり遠花火

斎藤 みよ

赤まんなこの道の光学びの庭
笊持ちて子供の使ひ新豆腐
新豆腐箸よ匙よと騒ぎたて
好物の新蕎麦あてに地酒酌む
曲り角仄かに灯す秋の家

梅澤 輝翠

壁を這ふ蔓先燃やす大西日
容赦なく西日目に入る逆上り
かなかなが朝靄の山目覚めさす
流れ星寝転ぶ闇に草香る
「口々参上」ヒーロー叫ぶ夏広場

秋山 紅花

蛸や担ぎ手鼓する鬨の声
初参加ラッセルラッセと跳ね人の子
病室の窓に果てゆく大西日
流れ星息せき切つて最終便
蛸や単線軌道またえんこ

山口 韶子

あの色は吾が初恋のさるすべり
百日紅人の寿命は見えぬもの
百日紅つらつら想ふ娘の笑顔
朝な朝な足腰きしむ残暑かな
秋暑し直ぐにとまりぬオルゴール

高橋 敏子

百度踏む鎮守の杜に遠花火
犬の仔は鼠火花を追ひ廻す
墓参り終へて見下ろす城下町
墓参終へ一陣の風吹き過ぐる
潮騒やあたり小暗く遠花火

さいたま 白田 みち

藍浴衣足元白きスニーカー
藍浴衣スマホ滑らすネールアート
四五人の異国言葉の染浴衣
藍浴衣視線を上げて腰のばし
浴衣着て浴衣の妻の襟なほす

東京 水落 守伊

新涼や鯉ゆつたりと蔵の町
夕空にうす紅やさし合歡の花
サングラス似合ふ人みて外しけり
夜の雨払ひて咲けり白芙蓉
新涼や風首すちに心地よし

栃木 佐々木典子

女郎花健やかなりて姉いもと
つくづくと合はせ鏡の九月かな
夢見んと蛇穴に入る朝となる
つつまれて藍より青き葡萄園
虫時雨寂しさばかり生みつづけ

所沢 関根 千恵

旅心そそる線路の月見草
夏蝶の今宵の宿り見極むる
救急車が音消してくる熱帯夜
ねえあなた周忌教へて盆がくる
邪魔な雨施餓鬼のお練りままならず

横浜 川島 典虎

飛の魚玄界灘の風に乗る
飛魚の波間に銀の羽広ぐ
どこまでも車内ぬすはる残暑の陽
広島忌路面電車に一時間
本閉ちて忽と広がる虫の闇

さいたま 下川 光子

消灯を言はれ書を閉づ夜の秋
施餓鬼会の招き断る車椅子
大文字消えゆくテレビ手を合はす
帰る人来る人ホームの盆三日
幾つもの台風送りなほ豪雨

山岸 弘子

水槽の水を染めたる金魚かな
雨の午後飽かず眺むる金魚鉢
雷や仏間に急ぎ駆け込みぬ
仏壇へ母の好みし豆ご飯
缶ビール夫と分け合ふ夕餉かな

高原 和子

夕焼や千年の恋焦しさう

炎天にスコップ三味線ビル谷間

三世代山搔き分けて墓参り

数珠つなぎ空蟬数ふ朝の庭

朝顔の蔓からまれて家覆ふ

和歌山 南條きわゑ

蕨 細井 良子

句帳手に座す緑陰の木のベンチ
道標の石にちよこなん青蛙

蓮の花四本咲かす寺の池

写経する手元明るく青葉の夜

寺の池水面ゆつたりあめんぼう

墓参り^{つま}の亡妻の影を秘す

線香花火落下のあとに溜息の子

真下席五感震はす大花火

晴天下天井破る秋の雷

ぐち一つ眩きながら墓洗ふ

さいたま 川村 治

いすみ 平石 睦子

上総にも義経伝説^{つた}雲
カンナ野放図細道を尚細くして

秋暑し子ほどの人の計報聞く

花野来てつい遅れがち歩こう会
測り直す血圧正常涼新た

向日葵の視線浴びつつランチかな

老僧の声朗々と秋立ちぬ

立秋や庫裡の廂を撫づる風

境内の大樹脈打つ秋暑かな

異国語の飛び交ふ茶房街残暑

和歌山 宮井美恵子

さいたま 竹澤 和子

朝採りの薬味盛りあげ新豆腐
冷え冷えのガラス器に盛る新豆腐

異空間めきて渋谷の盆踊

我が町の地名を誇る踊唄

線路まで曲がりさうなる猛暑の日

球児らの喚声^{わん}聳す炎天下

老いては子に従ふ日々や合歡の花

炎天に子等はしやぎをりバス待つ間

風下に煙と音のみ大花火

夢二絵のモデル撫で肩酔芙蓉

さいたま 田中 泰子

小川 洋子

人波に勇み槽の椀さばき
友を入れその輪ひろがる盆踊

鯛や閉店早き道の駅

井戸水に冷やし素のまま新豆腐

新豆腐ざるに汲み上げ藻塩ふる

打水に飛石光る夕餉前

東京 河原 叔子

緩やかに暮るる川面に宿浴衣

雷去りて読み止しの本腹の上
当節は怒らぬ親父はたた神

町田 瀬戸雄二郎

あれもこれも歴史感じる夏座敷
遠ざかる昭和の歴史八月忌

昭和一桁人生の宝端居して

夏の月人波引きし軽井沢
麦茶冷やし秩父札所の御接待
線香花火小さな恋を落すまじ

透明な玻璃に初秋の気配して

鈴木 和子

青空を我がもの顔に秋茜

さいたま 福田 育子

赤とんぼ止まりし如く風に乘る

切り抜き帳なんともならぬ残暑かな
太公望釣り竿の先に赤とんぼ
鮮雲母の手と手に靴がなる

しやらしやらと裏山の水寺新秋
爽籟や林を抜けし所に宿

終戦記念日疑問文ばかりの一日

八十路婆くの字しの字の胡瓜もぐ

小浜 松島 寛久

和歌山 高橋満耶子

ナイターのテレビ弾ける乱打戦
打水に草鞋の湿り大原女

三尺玉の天地ふるはず大花火
令和初の猛暑に沸くや甲子園
球児等の汗あせあせと涙かな
墓詣でそちらの気温どうですか
足触りさらさらとして夏座敷

老いてこそ苦もなつかしい秋扇
長老の答は明解秋扇

青海月の大発生や大花火

和歌山 葛城千世子

勝敗の涙つたはるサングラス
児が泣いて蟬一斉に加はれり
向日葵が首を上げるや夜の風
青青と真珠の光夏の雲

大阪 飯塚智恵子

夏休み親子でゲーム漬けの日々
オムライスのリクエストあり夏休み

工作の仕上げはパパや夏休み
籠球やすばやき汗のモップ掛け

足の指戯れるかに蠅の這ふ

源平の白蓮紅蓮八幡宮

お揃ひの浴衣とズック兄おとと

七十九年の母の生涯花水

あめんぼと子供共生水溜り

精一杯祖先に感謝益まつり

青梅やはち切れさうな肌の艶

夏座敷ばちつと響く王手飛車

目移りす色取りどりのかき水

打水の庭にしみ込む速さかな

八頭身の横顔かくす夏帽子

桑の実摘む鉄橋渡る音遙か

山寺へ長き石階雲の峰

白南風や路面電車は港行き

白南風にふはり青いろ和紙ピアス

点火の瞬間息を凝らして大文字

大西日金色に酔ふクリムト展

法螺吹きしあとの高揚梅雨の明

芋虫の思案しどころ枝分れ

あーと鳴く鴉に気抜け残暑かな

宮代 関谷多美子

さいたま 反町 修

川崎 鈴木 玲子

吉川 杉浦 理恵

西日差す枯れ松なほも立ちをりぬ

西日差す寺の榎の影長し

鯛やジャズの夕べとコラボする

鯛や山の麓に点く灯り

咲き満ちて廃屋保つ百日紅

秋暑し紅の花びら絡み合ふ

忍ばせる旅に形見の秋扇

懐かしき里道埋むる秋の草

秋夕焼貨物列車の長きこと

大げやきゆらし颯風去りにけり

輪王寺満月かかげ能舞台

新涼やペランダ広きことなども

この指に誘つてみる赤蜻蛉

気を止めて待ち伏せする子鬼やんま

電線に揃ひしとんぼ夕間暮れ

籠に満つ蜻蛉夕日に解き放つ

菜園も路傍の草も喜雨待てり

夕暮の贈りものなり青田風

七十四年時は流れて敗戦忌

墓洗ふ過去碑の年を数へけり

さいたま 千坂 平通

若狭 岡本 祥子

さいたま 山下ユリ子

緒方みき子

鬼石 榊原 聰子

暁の開聞岳を見やる夏
聞く耳を持たぬ爺や遠花火
絶対と君は言ふけど菊脛
人間も絶滅危惧種流れ星

さいたま 飯田 忠男

デパートのひときは涼し花氷
潮騒や浜萱草の遊歩道
土砂降りに霞む断崖夏の海
還暦の仕事仲間の逝きし夏

さいたま 野村 美子

西日射す助手席背後から寝言
葉隠れの蝸の鳴く無人駅
屋上へ螺旋階段西日中
参道の廻りズム一休み

上野 宜子

炎昼のベンチに人の気配なし
猛暑中眉間のしわの取れ難し
水替への指切りげんまん金魚飼ふ
花盛る水ごくごくと百日紅

東京 柳父 はる

白南風のバス停弾む会話かな
梅雨晴間亀乳白の卵産む
兵眠る合歓咲く島の戦禍跡
合歓の香のただよふ庭や夕じめり

春日部 諏訪サヨ子

茅葺を包む朝もや蟬の声
小窓より西日ひとすぢ蔵の中
砂利道を我が影連れて日傘行く
ミラーボールが色を振りまく夏の夜

さいたま 湯浅 和

小さき黄花を入れて仕上がる花氷
あめんぼの下をゆうゆう鯉のゆく
ひとりで着れる浴衣で逢瀬浅草へ
華やくや今は見頃の蓮の花

さいたま 森下美智枝

すがも銀座日傘の列に客を呼ぶ
ティータム椅子にかけたる白日傘
荒梅雨や屋根に広がる青シート
とりどりの日傘が守る熱中症

武田 重子

愛の鐘鳴るも帰らぬ雀の子
生かされて孫より貰ふお中元
補聴器が捕ふる風や秋の声
染み隠す化粧を嗤ふ女郎蜘蛛

藤 沢 小島喜代子

咲き満ちてつぼう百合の夜となれり
セピア色に萎えし草花水を打つ
老木にしがみつき鳴く法師蟬
閑談は心の養生にぎり鮎

櫻井よし江

襖はづし子等の並べる盆料理
不細工も御先祖喜ぶ茄子の馬
大西日の恵み果物色づきし
大西日高層ビルに乱反射

さいたま 長井喜代子

水馬風に透かせて自在なり
忍城へ続く道々萩揺れて
着付けされた浴衣の娘祖母似なり

さいたま 菅原 真理

草の花魂の代打ホームラン
剃刀を研ぐ理髪師や秋涼し
遺影置く縁に手酌や酔芙蓉
ゴミの日のほほゑみ交はず涼新た

安倍 弘夫

鎌洗ふ水面に水馬跳ぶを見る
野菜蔓踊り上がるや雲の峰
我が街を雲の峰々囲みをり

越谷 阿部 幸代

人麻呂も逢瀬を詠みし天の川
打水し三十九度に抵抗す
流灯や友の面影遠ざかる
白き手と白きうなじや風の盆

草加 外村 紀子

いつになく家路恋しや梅雨湿り
雨降れば雨のワルツをあめんぼう
合歡の花昭和の少年集ひけり

若狭 檜鼻ことは

盆休みただぼつねんとひとり座す
短かき恋ただ腹を出し眠る蟬
藍浴衣母の遺せし紅をひく
帰省子のため息ばかり高速道

東京 畑宮 栄子

驟雨去り碓氷峠に戻る静
木の根っこ跨ぎて進む踊りの輪
望の月毬藻が一つ生まれしか

さいたま 鈴木 藻好

盆休み家族そろつてバイキング
西日さす花瓶の水を入れ替へる
西日さす窓に巻き付く蔓強し
盆をどり親子手を振り砂利の音

さいたま 内田 雅代

長生きの父や湯宿の秋の蟬
吹く風のやさしき木陰秋の蟬
カンナ咲くバス停前の喫茶店

さいたま 木村るみ子

三郷 沼尾 岳

日盛に吾影さがす誕生日
かき氷舌出し合つて仲直り
不出来でも乗り心地良し茄子の馬

お盆月ケアマネ偲び香を焚く
西日さす豊の色焼け心配す
お盆月懐かし友とお喋りす

母の故郷は晴好雨奇や望の月
子は巢立ち愁眉を開く避暑の旅
親探す襦袢濡れし子潮干狩

さいたま 綿貫ひさの

落合 和枝

小川 藤間 友二

☆ ☆

2020

現代俳句

カレンダー

揮毫	
宇多喜代子	高野ムツオ
宮坂静生	桑田和子
安西篤	石寒太
高橋将夫	松澤雅世
橋本喜夫	山崎十生
寺井谷子	佐怒賀正美
花谷清	秋尾敏
久保純夫	花房八重子
山田貴世	柿本多映
	(掲載順)
	西谷剛周
	山本鬼之介
	鈴鹿呂仁
	対馬康子
	福本弘明
	川村智香子
	伊藤政美
	中村和弘

- 体裁 四色刷・月別壁掛・壁掛時B3サイズ
- 定価 一部 一、五〇〇円 五〇部以上 二割引
- 送料 実費

カレンダー購入希望の方は、
水明発行所総務部までお申し込みください。

東京四季出版 〒189-0013 東京都東村山市栄町2-22-28 電話(042)399-2180 FAX(042)399-2181

作品評

山本 鬼之介

覇者いづこ墳丘わたる秋の風

原田 秀子

墳丘の意は、「墳墓として、盛り土をして築造された小高い丘（広辞苑）」であるから、掲句の墳丘を、埼玉県行田市に在る「埼玉古墳群」の古墳の丘に当てはめればすっきりと読み取ることが出来る。五世紀後半から七世紀初めの一五〇年間に築造されたとする丸墓山古墳（日本で最大規模の円墳）稲荷山古墳（「金錯銘鉄剣」が出土して一躍有名になった）二子山古墳（武蔵国最大の前方後円墳）など、九基からなる古墳群を巡り、そこに祀られた豪族たちに思いを馳せると、作者と同じ感慨に耽ることが出来るだろう。曼珠沙華に染まった丘を吹き渡る秋の風、「覇者いづこ」の言葉に、作者の熱い思いが籠められている。

地ビールや琥珀の底のメランコリー

正木 萬蝶

一九九四年に酒税法が改正されてビールの小規模醸造が可能になり、地ビール（地域に根付いて造られるビールの意）ブームに乗って日本国内に三〇〇軒を超えるビールの小規模

醸造所ができたと言う。その後、アメリカで起きたクラフトビール（職人技によってビールの味と魅力を深く追求する）ブームの波に乗って、日本の地ビールがさらにレベルアップした。大手ビール会社も次々に新銘柄を繰り出しているが、地ビールにはそれとは違った独自の魅力がある。まさに手作りビールの魅力である。琥珀色の地ビールを飲んでいううちに、そこはかと無い感傷が芽生えたのであろう。ビールの酔いに心を委ねたい一夜であったのか。

カルタゴの海の青さよ花石榴

日高 徹

この俳句の原点が何処にあるのかに思考を回らした。季語となつている石榴の原産地としてペルシアが出てくるので、そこからカルタゴへの発想が生まれたのかとも思ったが、もしかすると、作者が観光旅行か仕事でカルタゴ遺跡のある地を訪れ、そこに実際に石榴の花が咲いていたとも受け取れる。そうであれば、石榴の花の鮮紅色と海の青さの対比を見ていることになり、いま目前にある石榴の花からカルタゴの海へ思考を転回することに不自然さが無い。フェニキア人が建てた古代の植民都市国家カルタゴは、地中海貿易と強力な海軍力で勢力を拡大したが、ローマとの覇権争いが激化し、第三次ポエニ戦争でローマに完敗して滅亡したと伝えられている。こうした古代史を背景にこの句を鑑賞すると、俳句の奥行の深さが見えてくる。作者の代表作になる作品と認める。

海霧深し生まれ故郷は今他国

近藤 徹平

濃霧に包まれた海岸に佇ち、遠い過去の自分の出生地を偲んでいる作者。以前作者から聞いた想い出話を引用すると、この場所は新潟港で、他国とは旧・満州国のことになる。日本の傀儡国家とも言われていたこの地には往時多くの日本人が在住し、筆者の妻もその中の一人であった。命辛辛祖国へ引揚げてこられた人々の苦労話や、引揚げが叶わず現地に置き去りにされた残留孤児の悲話など、満州国に纏わる話題が未だに多い。菊池章子、そして、二葉百合子が熱唱した名曲『岸壁の母』が映し出されてくる作品である。

一匹の蚊を討ち果たす丑の刻

保坂 翔太

昔の時刻名である「丑」は、「丑の刻参り」や「草木も眠る丑三つ時」の言葉で馴染みがあり、今の時間にすれば大凡午前二時頃になる。いわゆる真夜中であり、最も熟睡している時間帯に舞い込んできた一匹の蚊。低い唸り音を発して睡眠を妨げる無頼者を追いかけ、遂に仕留めた時の満足感が満ち溢れた俳句である。親の敵を追い続け、遂に積年の恨みを晴らした仇討ち侍のような心境であったのだろう。「討ち果たす」にその時の心の高揚感が確りと詠み込まれている。

秋の風牛の睫が反りかへる

越田 栄子

俳句の焦点を牛の睫毛に当てたところに独自性があって非凡な俳句になった。街の中や電車の中などで、マスカラや反り返った付け睫毛で地顔を演出している女性を見掛けるが、その対象を牛にもってきたところに作者の鋭い観察眼と豊かな感性を感じる。秋風が牛の睫毛を幽かに揺らしている。

カフェの灯が消えて岬の星明り

野田 静香

海の保養地に在る洒落たカフェ。夏のシーズンを過ぎて客も少なくなり、夜の八時を回る頃には店の明りを消すだろう。折からの星月夜で、遠く外海へ延びている岬の上に、数え切れない星が瞬いている。海岸に居合わせていた作者が、心の中にその景色をスケッチしている。何時の日か、想い出の絵として描かれることだろう。

なめらかなる沼のゑくぼにあめんぼう

大塚 茂子

風のない穏やかな沼の水面をあめんぼが独占している。水を渡る忍者のごとく、水面を走り回るあめんぼを、沼にできた罎（えくぼ）と観た作者が素晴らしい。

呼び止めてすぐ追ひ立つる行行子

曲淵 徹雄

遊水地や河原の畔で賑やかに鳴き交わしている葭切である。そういう土地に住んでいる人にはただ騒がしい鳥として見向きもしないであろうが、接する機会の少ない都会びとにとっ

ては、魅力のある鳥かも知れない。葭切を観察しようと近づいたものの、あまりの騒がしさに敬遠した状況を、葭切の立場に立って詠んだところに妙味がある。

陽の落ちて影絵となりぬ芒原

渋谷きいち

芒原といえは箱根仙石原が目には泛ぶが、黄昏時や月光を浴びた夜の芒原を思うとさらに実感が迫ってくる。芒そのものの細部については分からないが、群れをなして動く芒は無気味であり迫力がある。子供の頃、障子に映し出された影絵を見て感じた不思議な世界が還ってきたような気持になった。

始まりは「とりあへず」と言ふビールかな

青木 鶴城

酒飲みにとつて、アルコール飲料の種類を順序立てて飲むという決まりがあるわけではなく、理屈を述べれば、アルコール度数の低いビールから慣らしてゆくことで悪酔いを防ぐ効果があるのかも知れないが、幾つかの酒を飲んでから最後にビールで仕上げをする場合もある。しかし、日頃の習慣としては、昔も今も自宅でも外でも「先ずビール」で始まっている。本句は、そうした酒飲みの心理をさらりと表出した傑作である。今夜もやはり取り敢えずビールでスタートか。

四本の足の不具合茄子の馬

太田 絹映

盂蘭盆の、折った割箸を茄子に刺して作る馬である。三本

なら常に安定するが、四本だと、正確に刺さないと安定しない。そのアバウトさがこの行事の性格に合っているのだと思うが、気にする人にとっては妥協できない事だろう。この馬に乗ったご先祖が、乗り心地の悪さに苦笑いしている。

廃屋と思しき庭の枇杷たわわ

加藤でん治

昨今、改築のために取壊す家や空家となった家を見掛ける機会が多い。廃屋と思われる家の庭に薔薇が見事に咲いたり、楓が色づいていたりしたら、余所事ながら心が動くかと思う。この俳句によれば、その味はともかくとして、枇杷が鈴生りになっていると言う。思わず入り込んで採りたくなる心理を上手く表現している。

秋暑し宿に帯解く影法師

田中 章嘉

外から宿の障子越しに見たのか、同じ宿の庭を挟んだ向かいの部屋の様子か、何れにしろ艶めいた景である。季語が折角の余韻を無にしているように思えるが、妥協の範囲と思う。

星月夜貧しき国の頭上にも

新 曆文

賞味期限切れの食品が毎日大量に出る自国とは正反対に、日々の食べ物にも事欠く国々の人のことを思った時、夜空に瞬く星が、救世主のように見えたのであろう。

散歩道行きもかへりも桐一葉

河野はるみ

短時間の間に、桐の葉の落ちるのを続けて見ることは稀ではないかと思う。何時もの散歩道の何時もの家の前を通った時、眼前に桐の葉が落ちてきた。そして帰り道でも同じ景に遭遇した。縁起を担ぐ性分ではないが、何故か幸せな気分になった作者。ジャンボ宝くじを買っていたら……。

赤とんぼ赤を供ふる仏みち

神田 治江

六地藏や風化した野仏が点在する田舎道。すーいすーいと長閑に飛び交う赤蜻蛉が、初秋の景色を決定づけている。次々に石仏の頭に止まり翅を休めている。赤頭巾と赤い野花を供えているかのように。

踊り子の月まで伸びむ指の先

笹本 啓子

日本三大盆踊といわれる西馬音内盆踊（秋田県羽後町）^{ぐじょう}郡上八幡盆踊（岐阜県郡上市）・阿波踊（徳島市）そして、富山県八尾町の風の盆など、歴史のある盆踊で見られる女性踊り子の一斉に揃った優美な指先が目につかぶ俳句である。「指の先」でか나りのことを表現しているが、「月まで伸びむ」の言葉遣いによって、震い付きたくなるような仕種が伝わってくる。風の盆には一度訪れたが、他の盆踊はまだ機会が無く、ぜひ見物したいと思っている。

上総にも義経伝説鱗雲

平石 睦子

一口に義経伝説と言っても、その内容は多く、また複雑である。鞍馬山で天狗に剣術を習った、五条の橋の上で辨慶を打ち負かした、壇ノ浦の戦いで八艘飛び、安宅の関から奥州へ落ち延びて高館で討たれたが、実は生き延びて蝦夷地から大陸へ渡り成吉思汗になったという信じ難い伝説もあり、興味が尽きない。さて、上総に遺されている伝説とは如何なるものか。秋空を覆った鱗雲の中から義経が現れそうだ。

ロープウエーにじつといつしよに秋茜

鈴木 和子

赤蜻蛉が同じ場所に長く止まっているのは珍しいと思うが、人間の意思が通じているように乗客と一緒にゴンドラに乗っている。なんとも微笑ましい情景である。

八頭身の横顔かくす夏帽子

反町 修

八頭身という言葉から、伊東絹子の名前を思い出した。調べたところ、彼女は昭和28年7月に開催されたミス・ユニバース世界大会で第三位になり、見事なプロポーションを指す「八頭身美人」のキャッチフレーズで活躍した。欧米並みに足長の女性が増えた現在でも、日本人の八頭身はごく少ないそうで、この句を読んで八頭身が貴重な存在であることを再認識した。夏帽子に隠れた横顔が実に魅力的である。

水琴窟

(水明集九月号鑑賞)

池田 雅夫

忘れたる思ひ出ふつと濃紫陽花

下川 光子

ふとした切つ掛けで、忘れていたことを思い出すことがある。父母のこと、友人のこと、あるいは幼少の頃のことなど多様に及ぶ。「濃紫陽花」の濃くなつてゆく色の変化が、鮮明になつてゆく思い出の懐かしさと重なる。

溜息をつくごと夜の水中花

高原 和子

「水中花」は本来玩具であつたが、松坂慶子のヒットソング「水中花」以後、大人の雰囲気を感じる。水を替えたばかりの水中花に気泡でも付いていたのであろう。それを見逃さず「溜息」と捉えた。「つく毎」と解釈してもおもしろい。

新茶よと出され長居の始まりぬ

松田 朋子

「長居の始まりぬ」から、二人の関係、親しさが窺われる。「新茶よ」の飾らないひと言で、お茶の甘みも香りも一段と引き立てられる。そして、取り留めのない話がつづく。はては、茶請けは何であつたのだろうか。楽しい句である。

履き馴れぬ下駄につまづく梅雨の入り

細井 良子

下ろしたての下駄であろうか。下駄の履きごこちは鼻緒の調節次第。ゆるくてもきつくても具合が悪い。近ごろは下駄を履く機会がほとんどなく、たまに履いた下駄に足の運びもおぼつかない。微妙な心理を「梅雨の入り」で表わした。

深刻な話麦茶をさりげなく

平石 睦子

「折り入つて相談したいことがある」などと、友人知人が訪ねて来た。人のいい夫婦は冷静に話の聞き役に徹している。そして頃合いを見計らつて冷たい麦茶を差し出した。「さりげなく」の心遣いが問題解決の糸口となつたにちがいない。

夏の海亀の甲羅に発信器

高橋満耶子

熊野灘の入江の浜にも海亀の産卵地があるのだろう。しかし、年々その産卵地が減少している。生態を知るための研究も進められている。亀の甲羅に発信器を取り付け、保護・増殖を計る努力がされている。亀が悠々と泳ぐ景が見える。

水槽の目高追ひゆく母子の眼

上野 宜子

目高の繊細な動きと、それを見つめる母子の姿がほほえましい。母子の純心さが伝わってくる。「目高」と「母子の眼」の「め」を相対させたところに推敲のあとが窺える。

「芒種の候」以下ながながと姉の文

安倍 弘夫

手紙の形式は冒頭語のあと、前文として時候の挨拶、本文、末文、結語とつづく。「芒種の候」は時候の挨拶。形式に則って細々と近況の報告が書かれている。嬉しい便りであるが、少し堅苦しく思っているのかも知れない。姉の貫禄充分。

溪流の音静まりて水馬

山下ユリ子

急峻な谷川の流れもここに来てようやく緩やかになり、水馬の生息できる程になった。「音静まりて」に、時間的、空間的な広がりを感じる。溪流の激しさと対照的に穏やかになった川を「水馬」で巧みに描写している。

寂しさを水面に写す糸蜻蛉

岡本 祥子

体長三センチほどの糸蜻蛉はいかにも弱々しい。草原の道端や水辺をゆつくりと飛び、草や枝に留まる。本来は、寂しいとか嬉しいなどの感情を直接表現しないのが原則であるが、本句は全く違和感がない。糸蜻蛉の特性によるのだろう。

屋久杉の命の音聴く夏の旅

小鳥喜代子

樹齢ン百年の屋久杉、その巨大さに圧倒される。人間の寿命より遥かに永く生きている。水分栄養分の通り道の通道組織。幹に耳を当てると微かな水の流れる音が聞こえる。

サングラス運転多少大胆に

長井喜代子

猪子青芽の句に（サングラス見知らぬ土地を大胆に）がある。サングラスを掛けると気持ちが大きくなるようで、行動に表われる。表情を隠すため、その心理を探る句が多い。「多少」と遠慮せず「外して大胆なる運転」と句も大胆に。

山小屋の外に出づれば山の音

檜鼻ことは

山の音を特定しないで、読み手に任せる巧みな技法。鳥の声、風の音など山の景が想像できる。眼前に広がる連山、雲海など音とは無縁の景色まで見えてくる。「山の音」と念を押したところに、山独特の環境の厳しさが感じとれる。

香水の漂ふ宵の銀座かな

鈴木 藻好

香水は汗などのおいを押えるたしなみとして用いられるので、夏の季語とされる。なまめかしい宵の銀座の一面をみごとに描写している。とくに「銀座かな」と言い切ったところが、夜の深まる銀座を暗示し想像させている。

櫓太鼓の誘ふ熱気五月場所

菅原 真理

すがすがしい五月の空に響き渡る触れ太鼓。若い力士の台頭で相撲人氣が復活している。「誘ふ熱気」の措辞がみごと。日本人横綱の出現を、一日も早く願って止まない。

鼓

笛

集

山中順子選



流れ星願ふ間もなくピルに消ゆ
腰沈め秩父音頭や盆踊り
流灯の波間に沈む闇夜かな

村杉 清吉

秋なすび藍より青く漬け上る
鴟日和格子戸多き宿場町
鴟高音一直線の滑り台

笹本 啓子

ただ一本白曼珠沙華無言なり
摘むでなし言はれて久し彼岸花
月夜にも闇にも赤く曼珠沙華

河野はるみ

山頂の薄の銀波風渡る
伝統の囃しも消えて秋深む
星月夜車窓流るる家あかり

塩野 久子

山寺の座禅無にしてかなかなかな
枝豆のこんもり盛られふくらむ香
秋の昼カフェに青児のパリジェンヌ

鈴木 玲子

おこぼれは大地の恵み零余子めし
気が付けば友と逸れて茸山
騎馬戦に勝つてお重の栗おこは

渋谷きいち

秋の七草巡りの証御朱印帳
穂芒をタクト代りに帰り道
ふくふくの赤子を抱く良夜かな

越田 栄子

高麗人のチョゴリ懐かし曼珠沙華
虫の音に耳欝てし厨窓
階段に猫円居する秋日和

諏訪サヨ子

熊倉千重子

夕空に掠鳥の声のみ姦しき
苔むせる人身御供碑曼珠沙華
通知簿は2と3ばかり吾亦紅

染谷 正信

鳶も舞ふ心満ちたる敬老の日
人と逢ふことも刺激に敬老の日
秋めくや約束せしまま旅未だ

河原 叔子

空蟬を孫にと仕まふ仏壇や
一瞬の美閉ぢ込められた花氷
吹きまくり降りまくりての野分かな

菅原 真理

真つ新たな卒寿の心月天心
口だけは達者達者な敬老日
敬老の日のピング遊びの盛り上がり

川島 典虎

先頭は紋付が練る村祭
しんがりの山車は荷台に村祭
膝頭並ぶ野点や秋日和

下川 光子

目いつばい吸盤開き守宮かな
晚酌をしつつ栗むく慣かな
河川敷葛の落花の径を行く

榊原 聰子

榎植の実どこからみても反抗期
新米のまづ一口の旨さかな
ひとり居にこほろぎの来て夜を頷つ

佐々木典子

目覚めて頬に秋意の風覚ゆ
大輪の菊月日の重みありありと
木の実落つ疎林に一つ音たてぬ

神田 治江

かなかなの鳴くことだけが人生だ
子等去りて鯛低き枝に鳴く
鯛の好む木ありて子は知れり

瀬戸雄二郎

山路来て秋草の群風に揺れ
天空の湖飛ぶあだな銀やんま
吾亦紅ワインレッドの濃き想ひ

鈴木 和子

青年の顔して少年御輿担ぐ
初診受け医院の前の百日紅
体調が微妙に変わり夏終る

小杉 自子

学校行事に親子で参加蝗採り
愛し子の油彩描き了へ九月かな
ズバリ謂ふ友今は亡く酔芙蓉

関谷多美子

鼓笛集作品評

山中 順子

流れ星願ふ間もなくピルに消ゆ

村杉 清吉

星に願いを聞いてもらうメルヘンチックな作者に会って見たくなる。しかしこの頃は都会では星を見る事が難かしい。しかも流れ星を見るには余程山の方に行くしかない。しかし作者は見えない星に願いを託した心根がこの句を無の世界に誘ってくれる。

腰沈め秩父音頭や盆踊り

秩父音頭は腰の使い方が難かしい。腰沈めが何とも云えない風土性を醸し出している。

中七の「や」の切れ字が踊りの息遣いを気付かせてくれる。

ただ一本白曼珠沙華無言なり

河野はるみ

紅の中の一本だからこそ魂が揺すられ、無の中に動の吐息が感じられる。好きな句です。

私の好きな一句（自句自解）

森下美智枝

夏帽子橋また橋の隅田川

歩け歩け運動に参加しました。浅草の吾妻橋から清洲橋まで隅田川沿いを歩きました。次々に表われる橋の形はみな違っていきます。親水テラスの歩道は花壇や絵画がありとても快適でした。ゲートブリッジも歩き二万歩になりました。大江戸温泉がしめくくりでした。

鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
- 二百字詰原稿用紙をお使い下さい

編集部

句集喝采

井口 俊晴

◆佐々木リサ『冬萌』

本阿弥書店

著者略歴 昭和十七年岩手県生。平成二年「好日」入会。十一年「好日」退会。十三年「かびれ」入会。十五年「かびれ」維持同人。二十一年かびれ新人賞受賞。二十三年かびれ賞受賞。俳人協会会員。日本連句協会会員。

句集名は「冬萌や鬨志といふは静かなる」から。「冬の寒さに耐えながら、春へ向けてのエネルギーを蓄えている冬萌にはとても引かれます」（あとがき）と著者は述べている。

春光や琥珀の中に眠る蟻

海猫の声の渦なす帰省かな

足元に秋の来てゐる渚かな

故郷の星は大粒魂送り

著者はご主人ともども東北の人。琥珀は岩手県久慈市で採れる。大昔の蟻が樹液の滴りに囚われ、琥珀に封じ込められた、その姿が愛しい。渚を舞う海猫、夜空の星座…。

平成二十三年三月、あの大震災がふるさとを襲い、多くの人と家が津波に飲み込まれた。

冴返る村が消えたといふ知らせ

息災とふ言葉しみじみ鳥雲に

「かびれ」には「生活即俳道」という指針があるそうだ。

だからこそ、どのような状況にあろうとも、その精神を胸に「俳句を楽しむつもり」だと著者は言いきる。

なお、大竹多可志主宰が寄せた「序」は、とても心がこもったもので、感銘を受けた。

◆関根道豊『地球の花』

角川書店

著者略歴 昭和二十四年埼玉県生。平成二十六年「港」入会。二十八年「港」新人賞。三十年「港」同人賞。新俳句人連盟会員。現代俳句協会会員。

「日々の生活のなかで出会う感動や疑問を五七五の韻文に記録し己と時代を見つめる」ことが著者の俳句信条である。「あとがき」の冒頭にある言葉だ。

空蟬の真上に蟬の鳴きはじむ

蛸は女工の声か峠越ゆ

この星に核は居座りメロン食ふ

青ぶだう署名を拒む被爆国

木の幹にしがみついた蟬の脱殻の真上で鳴き始めた蟬、新鮮な表現の中に、何か社会の不合理とか不安が隠れている気がする。蛸に連想される野麦峠の哀しい記憶も、不平等や弱い者いじめがなくなるなら社会への苛立ちだろう。

だからと言って、いつも難しい顔をしているわけではない。どこか悠々とした著者の毎日も感じられる。

木の葉ふる母の小言のやうに降る

湯豆腐や傍らに妻在る時間

麦そよぎ我が農民の血が騒ぐ

やあ風よ原発と基地いづく見ゆ

「港」の大牧広主宰は今年四月に亡くなったが、著者との約束を忘れず、序文の草稿が手元に届いたのは、なんと逝去当日の午後のことであった。

りんどう忌 の記

越田 栄子



第五十回りんどう忌は、九月十二日に、さいたま市民会館うらわに於て修された。

山本鬼之介主宰になって初めてのりんどう忌の参加者は五十名（内一名欠席）。兼題（忌又は上に秋のつく季語）の二句を投句。

会場には、かな女師のお人柄が偲ばれる温かな遺影が置かれ、供えられた花々に、爽やかな秋の訪れが感じられました。

司会

開会の辞

山中 順子氏
境 延昭氏

大勢の仲間とお会い出来て嬉しく思います。本日は五代目の鬼之介主宰となって初めての句会です。かな女忌も五十年を迎えました。今日は皆様方と共にかな女を偲ぶ句会を行ないたいと思います。

かな女師への黙祷

主宰挨拶

本日、りんどう忌は五十回を迎えました。かな女師が亡くなられて五十年、半世紀。たまたま五代目を継いで、五十年の五と五代目の五と参加申し込みが五十名と五の数が並び、来年の九十周年に勢みがつきました。

この度、俳句四季より原稿依頼がありました。て、花の歳時記に「桔梗」を選びました。

十一月号に載せるエッセイを書くため、かな女句集を繕き、かな女先生の桔梗の三句を書きました。句集を読み返すにつけ、かな女先生に近づいた気がして感慨深い気持ちになりました。

今日は皆さんの句を感慨深く鑑賞させていただきます。

喜寿のお祝

今年喜寿を迎えられた橋本京子さんには、主宰より名前を詠み込んだ句が書かれた、扇面の卓上屏風が贈られました。

披講

五明 昇氏 茂木 和子氏

主宰談

行き付けの来來軒の秋灯

今日もまた驟雨きたるやかな女の忌

主宰選

秋夕焼天地の限り焦がしけり
有馬筆は箱入り娘かな女の忌

山中順子
和葉

秋燈下坊主めくりの膝と膝	昇	秋日洩る詩心燦とかな女句碑	喜恵	空白を辿る日記や秋の夜	鶴城
秩父嶺に雲湧く忌日秋暑し	水尾	髪を摘み心新たにかな女の忌	微	りんどうの一片になりてかな女の忌	輝翠
落人のねむる湖秋の声	微	さざ波と戯むる少年秋の海	翔太	秋序章音合せする雑木林	由紀子
秋蝶の点となるまで舞ひのぼる	茂和子	鯨尺持つ祖母の手やかな女の忌	理恵	秘境駅で自撮り一枚秋の雲	きいち
かな女忌のなべかまやかん台所	さいち	童胆忌十七音の無限なり	でん治	かな女忌や朝露光る句碑に立つ	紅花
——以上特選	短冊授与	どこからか風の湧きくる秋桜	かつ子	本流に新たな流れかな女の忌	栄子
九十周年迎ふ眼が満つかな女の忌	山中順子	振鈴や言の葉降りてかな女の忌	倭子		
秋冷の畳に座せば祖師の影	和葉	秋時雨送りて雲の白さかな	萬二郎		
秋桜かく揺れぬしか昭和五年	ひろこ	ポニーテール馬上にゆれて秋の風	光子	特選の句をはじめご丁寧な講評がありました	
秋澄むや師系は確と縦の糸	昇	かな女忌のまなうらに浮く曼珠沙華	徹雄	現在の事なのか、過去の事なのかという	
秋の蝶意図無き如く揺らぎけり	寛治	童胆忌襟元合はせ読む便り	章嘉	事も留意するようにとご指導頂きました。	
肩にななめのズック鞆や秋澄めり	延昭	秋暑し一糸乱れぬ連の舞ひ	みち		
養生訓読んでは忘れ秋暑し	大場順子	秋簾漁師鬚屑の小料理屋	京子	御芳志の報告	茂木 和子氏
拗る掌に咲き遅れじと秋の草	光弥	句碑の肩しばし停まり秋茜	はるみ		
秋夕焼畑に鋤の置き忘れ	恵子	秋灯下写経の筆の細き影	義子	高得点者発表と賞品授与	
門灯で秋蝶息を整へる	清	大集合荒川べりの秋燕	公子	一位 五明 昇 二位 山中 順子	
秋風に舞ふは天女か現かな	節代	一系を守る志りんどう忌	千穂	三位 越田 栄子 四位 曲淵 徹雄	
かな女の忌師のふところにあるごとし	水尾	夜半の湯に現身鎮め秋彼岸	千穂	五位 森川 義子 六位 星野 和葉	
濡れる古都いにしへ浮かぶ秋の夜	治江	秋彼岸千鳥ヶ淵の鳩の群	微平	七位 矢作 水尾 八位 茂木 和子	
秋風や道草の実の色づきて	鈴木和子	こんこんと水湧く夜明けかな女の忌	瑤蘭	閉会の辞	星野 和葉氏
浄土にも句会あるらむりんどう忌	秀子	海底に戦艦「大和」秋暑し	藤十郎		
流麗なかな女の俳句秋の風	茂子	胸反らせ謳ふ校歌や秋高し	正信	本日は大勢の方にいらして頂き、主宰にも	
黒髪を梳く白き指秋簾	マスマ	秋深し思惟を共に勒勤仏	玲子	講評を戴きありがとうございました。かな女	
秋声はかな女の息か忌を修す	治子	椅子二つ誰待つとなく秋暑し	愛子	全集を飾れば良かったのですが、まだ残って	
				おりますので良かったら申し込んで下さい。	

水明例会



第一例会（浦和）

岸壁に鉄錆にほふ残暑かな
 白熊の水に入る他なき残暑
 席空けぬドリンクの客秋暑し
 法師蟬防人しのお国境
 作り顔の女の会釈秋暑し
 絵手紙をはみ出る日輪残暑かな
 文机に疵あと著き残暑かな
 防災のリユック身近に十三夜
 いざ出勤残暑ものはベダル漕ぐ

茂木 和子
 延昭 報
 延昭 報

大場順子 延昭
 徹平 子
 節代 子
 喜蘭 子
 理恵 子
 以上特選
 由紀子
 徹平 子
 マスミ 子
 チアキ 子
 節代 子

第二例会（東京本所）

吾亦紅村の役場の防災展
 予定表びつしりつまる残暑かな
 溶銃の取出す職や残者なか
 むしやくしやは残暑のせいよ水一気
 打ち揃ひ防火訓練秋暑し
 太陽が呑みつくすかに湖残暑
 線香も花も売る寺秋暑し
 古戦場にのこる防塁赤のまま
 産卵をせぬ鶏残暑を蹴り歩く

岡野順子 瑤蘭
 大場順子 光弥
 理恵 子
 治子 子
 喜恵 子
 延昭 子
 和子 子
 絹映報

暗闇の被災地照らす今日の月
 夕月を追つて小窓を明けはなす
 宇宙てふ謎の中なる月見かな
 箏の音の流るる園の月見かな
 流れゆく雲に走るや秋の月
 高階の窓開け放つ月今宵

蕙かづら椅子二脚おくピオトープ
 名月や廃屋までも美しく
 叢雲を潜りて月の歌歌りと
 満月や地上の影を深彫りと
 国東の月に浮かぶや磨屋仏
 白き皿葡萄をのせて輝けり
 酔ひたるか傾き出でし寝待月
 法名に「月」在る夫よ十三夜

以上特選
 登志子 敏江
 陽子 昭子
 昌弘 子
 昭子 子
 昌弘 子
 藤夫 子
 禮子 子
 峰雄 子
 玲子 子
 絹映 子
 五明 曲淵
 昇報 徹雄
 徹雄 子

第三例会（東京）

点滅の止まぬ門灯秋暑し

五明 曲淵
 昇報 徹雄
 徹雄 子

鯨の尾の反り美しき十三夜
終電を逃し見上ぐる後の月
肩が知る手の温もりや十三夜
結界へ風生臭し踊唄
虫の音や窓煌煌と夜学校
こほろぎに鳴かれ一と夜で古びし句
尼五山いよ鷹長けし十三夜
安曇野の葛裏返す初嵐

大場 順子
理 恵
康 世
萬 蝶
雅 夫
みどり
喜 久
昇

鬼灯に褪せぬ想ひ出幼の日
看板猫のそり銀座の十三夜
別れの手離さぬ母や十三夜
自転車のペダル踏み来る生身魂
嫁せし地の見知らぬ海や十三夜
影富士を揺らす風立つ十三夜
ただちや豆色よく茹でて十三夜
湯の小屋の蔀開けあり十三夜
十三夜電線の揺れ飽かず見る
秋風や指でなぞらふ千住絵馬
案山子はや土間に寝かされ十三夜
秋涼やすこし淫らな松の脂
秋夕焼牧に牛呼ぶ鳥ことば

—以上特選—
千 穂
萬 蝶
大場 順子
徹 雄
理 恵
康 世
喜 久
雅 夫
岡野 順子
清
みどり
祥 絵
昇

第四例会 (浦和)

外つ国へ子の去るデッキ秋夕焼

石井 喜恵
境 延昭 報
順 子

第五例会 (浦和)

草原に闇が育てし月鈴子

梅澤 佐江 報
河野はるみ
萬二郎

研ぎ上がる刃文きりりと花桔梗
即身仏祠に雨の白桔梗
バラグライダー秋夕焼に接近す
掛字換へ坪の桔梗の香を通す
厩から首伸ばす馬秋夕焼
うはずつたトランベットや秋夕焼
捲き上ぐる帆柱百本秋夕焼

順子
光 弥
翔 太
マスミ
恵 文
曆 文
喜 恵

秋夕焼パン屋の上を新幹線
デッサンの線のきまらず白桔梗
膨れたる荅の笑みて桔梗かな
「東下り」のゆかりの橋や秋夕焼
白桔梗辻説法の尼の笑み
黒々と鎮もる富岳秋夕焼
秋夕焼大川端は天に伸ぶ
星のごと凜と咲きたる桔梗かな
湖に映ゆ秋夕焼に誓ひけり
桔梗や紺緋着て写真館
桔梗や眠りの深きワイン蔵
ゆきずりに桔梗一本野仏に
秋夕焼祈りのことばそつと呑む
万葉の色を纏へり花桔梗

—以上特選—
光 子
恵 文
曆 文
マスミ
祥 太
玲 子
延 昭
修
寛 治
瑤 蘭
昇
でん治
光 弥
喜 恵

関西例会 (大阪)

土に生れ水は天から月鈴子
瀟洒なる籠に銀座の月鈴子
秋灯下磨る奈良墨の匂かな
古ミシン今つれづれに秋灯下
陽は西に鈴虫ソロで始まりぬ
鈴虫や組子の窓に吊す籠
内陣は人住めぬ席秋ともし
代々に伝はる刀秋燈
鈴虫に溶け入るやうに眠り落つ
古書店の「奥の細道」秋灯下
秋の灯を見下ろす硝子の昇降機
秋の燈に十七文字が解けゆく
秋ともし見返りの弥陀待つは誰
霧を吹き鈴虫の音を艶めかす

森本 早苗 報
早 苗
々
ゆら女
千津子
礼 子
洋 子
さわゑ
—以上特選—

高階を滑る名月ベダル漕ぐ
行けどゆけど光る線路やかな女の忌
たたみにごろり眠る赤子や秋あつし
一木に円陣組んで毒きのこ

推敲の脳にやさしき鉦叩

潮騒の高き海峡島渡る

見上げれば雲の自在や秋の天

午後もまだ一石日和秋暑し

葬儀終へ数珠放り出す秋暑かな

大男ばかりと秋暑のエレベーター

熊除けに鳴らす錫杖霧の中

手をつなぐ熟年夫婦秋暑し

婦人句会 (浦和)

西山貴美子 報

雁渡し三角屋根に風見鶏

混声の響調ふ雁渡し

生家跡見むと高きに登りけり

雁渡し裏磐梯の沼青し

雁渡し秘色の法衣風孕み

登高や御納戸色の地平線

登高のうしろ日の照る聖母像

山鳥の声聞く昼の茱萸の酒

雁渡し月夜の蝶とすれ違ふ

鳥待ちて青む沼の面雁渡し

敦子
ゆら女
洋子
智恵子
早苗

玲子

礼子

千津子

千枝子

和子

道子

さわゑ

北欧の友からメール雁渡し
摺り足のシテの僧衣や雁渡し

若松句会 (京橋)

菊池ひろこ
石田慶子 報

日に百回真剣振りて生身魂

酒飲むを流動食と生身魂

祖父いまだ軍服捨てず生身魂

名画座のシートに二人生身魂

兄傘寿長姉白寿の生身魂

生盆や一刀彫の飛驒の里

永久歯大事に使ひ生身魂
銀幕にするり入りこむ生身魂

バス停に丸き椅子あり生身魂
仏前の子等鬼灯を鳴らし見せ

案ずれば吾案じられ生身魂

怒られて笑顔の息子生身魂

鳥獣戯画巻物ゆるぶ十三夜

憂きことは忘れ給ひし生身魂

余生とはいつからと問ふ生身魂

生身魂「水戸黄門」を見て飽きず

三線や南の島の生身魂

利き腕にフランスパンを生身魂

ひさの
貴美子

俊晴

儀勝

慶子

はるみ

萬蝶

千春

ひろこ

以上特選

慶子

知子

千春

月を

萬蝶

佐江

鶴城

倭子

はるみ

ひろこ

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)

各地
句会



椋林句会 (大宮)

しんがりの山車は荷台に村祭
白磁器に節くれの指秋暑し
担ぐ腕生きいき並ぶ秋祭
屋敷神に赤飯供へ秋祭
カレー粉のスパイス利かぬ秋暑し

光子
一恵
知子
修
美佐尾

花ごよみ句会 (浦和)

白露なる此の坂登る幾年ぞ
老犬の少し元気に白露かな
栗羊羹前歯の欠けし児の笑顔

君子
和子
ユリ子

雛の会 (浦和)

大藁屋奥へ奥へと月明り
十六夜文の結びはあなかしこ
ひとりでは勿体無き夜月天心
憧れの人の舞台や月今宵

燈女
佐江
喜恵
チアキ

秋果盛るそこに棲み古る収穫祭
友秋果持ち来て何時もの長話
秋果盛る丸テーブルの共白髪
諍ふは親しみに似て栗おこは
りそな俳句会 (浦和)

璫蘭
むら子
輝翠
かつ子

逆縁の後姿や初盆会
殺生をみそぐ蟪蛄通り雨
蟪蛄や枯れてとびたつ生き方に
逆説で終はる会議や秋夕焼
柿の木塾 (浦和)

税子
仁
知加
美子

片恋のごとく消えゆく月の眉
秋の蚊と共に降りたる終電車
千鳥足の蚊連れて帰り来る
ふと降りた杖突峠に眉の月
眉月や阿波浄瑠璃の女形
眉月や黒く浮きだす武甲嶺
眉月や灯点し頃の母の声
元氣出せ秋の蚊余命尽きるまで
したたかなる残る蚊の針哀れとも
光が丘俳句教室 (東京)

久美子
寛治
曆文
建治郎
勲
雅夫
徹
克之
マスマ

計報あり今宵は月と般若湯
芋水車残し暮るる峽の村
月天心程よき石に腰おろす
がさがさと駄菓子子の袋月上る
真夜まとふ月の金粉露天風呂
名月や仔犬はそつばを向きしまま
芋しづくころがす風の出て来たり
何着ても美しゆうなる月見かな
青空市場里芋田楽に行列
満月や狸囃しが聞こえさう
はこべ句会 (浦和)

節代
昇
かつ子
恵子
光弥
俊晴
水尾
和葉
和子

台風一過ゴジラ映画のセットかと
朝市や無造作に置く秋の草
一人居の闇に烈しき野分かな
散歩道空にも地にも秋の声
無造作に活ける秋草あを黄色
芙蓉句会 (浦和)

守伊
はる
康子
史子
理恵
正子
道子

鳥兜一人は先に帰りけり
丈銃六の耳うつとりと月今宵
あぶれ蚊の腕に三匹三様に
神饌にピンと尾の立つ鯖一匹
発射へのカウントダウン秋高し
十六夜や投句の期日過ぎにけり
月光の及ばぬ先の阿吽かな
秋の蚊や埴輪の口にふつと消ゆ

さく子
貴美子
和子
愛子
光子
ひさの
敦子
美代子

蝸 蚪 の 会 (浦和)

田の中の車ボツンと秋出水
ダム工事底の静寂秋しぐれ
秋時雨ビロードゴケが変身す
山小屋の柚子シャーベット秋高し
秋しぐれ人気のカフェで独りきり
秋時雨頭にかざす手の広さ
つば広の帽子を深く秋時雨

幸子
宣子
さち子
元み子
鶴城
月を

水 明 松 本 句 会 (松本)

この膝はこの猫のもの菊日和
刈田風宙にカラスの乱れ舞
幼稚園庭に生えてるデカキノコ
秋彼岸花束選ぶ曾孫達
秋ざくら紺の夕山迫りくる

恒子
陽子
マリ子
玲子
寿子

珊 瑚 の 会 (浦和)

秋鯖や背に一本の青き筋
秋鯖をしめ魚河岸のをとこかな
萩の風真つ甲受くる反抗期
浜焼きの秋鯖を抜く串一本
水攻めのありし川辺に萩長ける
秋鯖焼く戯れ言少し許されよ
捨て舟や嗚咽に似たる萩の風
秋鯖の背に越前の海光る

光子
史代
和子
広子
和葉
かつ子
喜恵
マスマ

しらがねの波のかたちや萩の花
秋鯖に手秤で振る伯方塩
萩原や遊び仲間ば散り散りに

阜 月 の 会 (浦和)

山を見る馬の眼濡らす秋の風
テイタイム茶葉はアッサム蜻蛉来る
笑栗のはねてころがる峠かな
秋風に流るる雲の速さかな
秋風や筑波二山屹立す
野分あとやけに煌めく星のかず
秋風やかみしめてゐるいぶりがつこ

け や き の 会 (東京)

秋雨去り朝山鳩の含み声
路線バス林檎畑へドア開く
萩のトンネル出て山鳩と遭遇す

樺 の 会 (浦和)

ローカル線のホームに炎花カンナ
秋澄みて指呼に峨峨たり剣岳
花言葉言ひ得て妙の花カンナ
秋澄むや夫婦喧嘩も一休み
秋澄むや阿蘇に抱かれて馬遊び
荒れ地野にカンナ一輪空仰ぐ

水尾
昇
恵子
節代
静香
孝磨
カズ子
久子
節子
暦文
さいち
由美
祥絵
康世

カンナ燃ゆ晩学の身よ励めよと
手術終ふカンナの朱が目に染みる
風に干す大きな白布秋澄めり
若狭水明会 (若狭)

新米磨ぐ厨に軽ろし母の声
ひと筋の川秋草の中を行く
新米の穂に身なげする雀かな
へしこ焼く臭も嬉し今年米
秋草を揺らして停まる無人駅
新米といふ一瞬の舞台かな
新米を赤穂の塩で握りけり
新米に地卵かけて八十路婆
秋草や右巡礼の道標
新米に農家のゆくへ思ふ時
鈍行の旅を引つ張る秋の草

山 茶 花 (浦和)

大甕に秋草繚乱カフェテラス
秋草の丈や閉校記念の碑
秋草にうもれし廃屋風の中
けもの道びくびく拾つてくりのめし
秋草や駅で倒れしモスコイ帰り
野仏に誰が供へし千草かな
「くりめし」とその味忘れず所望せり
声明の様な風音秋の草

富子
彰二
治子
初花
和風
白鷺
冬至
保人
郁子
寛久
ことは
祥子
想子
マスマ
泰子
しず子
美江子
清一
光一
嶺一
綾子

あゆみの会 (浦和)

秋の宵白磁に残る魚の骨

画板を膝に案山子に見入る男の子

秋の夜の集く虫音楽しめり

折紙の鶴ふくらまず秋の夜

秋の夜シネマの余韻持ち帰る

老犬の息の安らぐ秋の夜

水明熊谷句会 (熊谷)

棄てられし仏頂面の榎櫃の実

足袋蔵の針子の袂花梨の実

堅物の堅さを通す榎櫃の実

武蔵武士菩提寺燃やす曼珠沙華

花梨の実ころげて匂拾ひけり

結実に長き十年花梨の実

花梨の実生のアロマを楽しめり

秩父路の畦に燃え立つ曼珠沙華

花梨の実砂糖漬して薬用に

如何ともし難し固き花梨の実

大宮読売俳句教室 (大宮)

大正琴懐メロを弾く秋の夜

目覚めてより腹式呼吸夜半の秋

新蕎麦を挽いてひすいの色をつけ

隠れ読むマルキ・ド・サドよ夜半の秋

和

重子

山遊

朋子

圭子

藻好

秀子

徹平

草太郎

藤十郎

治江

裕子

和子

栄子

燈子

茂子

好子

徹雄

卓郎

正信

秋の夜の推理小説下巻へと

新蕎麦を求め信濃路ひつじ雲

新蕎麦や真田自慢の五合酒

庭に来るリスと目が会ふ走り蕎麦

秋の夜や論語きのふの続きより

瀬戸内の風土育くむ走り蕎麦

秋の夜雨ふる音をひとりきく

新そばを求め山形そば街道

何処にする迷ふ木曾路の走り蕎麦

朝市の人皆素顔涼新た

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

イーゼルにニスの香かす草の花

減反の拡がる村や赤まんま

鯛食ふジンベエザメになつた気で

秋の宵能楽堂に夢ごこち

アプト式通ひし峠草の花

櫻蔭句会 (浦和)

吹かれる夕日を揺らす秋簾

秋風鈴吹く遅しき腕自慢

重陽や老舗駄菓子子のハッカ糖

吹き降りの夜も鳴きとほすちちる虫

風神の息吹に稲田波立ちぬ

ガラス吹く職人の町残暑かな

寛治

紀子

翔太

治子

君夫

サヨ子

典子

利子

弘夫

順子

延昭

正信

俊晴

淑子

昇

美紗子

静子

幸代

由紀子

公子

美子

菊の日や元気に揃ふ六兄弟

吹く風やかすかに秋の生まれくる

白萩の吹かれてそよぐ浄土かな

兄弟の話は尽きず菊の宴

重陽や八十路を節のクラス会

野ばらの会 (浦和)

テブ切るゴールの先の鯛雲

葡萄美し新種大粒黒緑

葡萄尽くす等は無言にスマホかな

鯛雲甲斐の山々繋げをり

スベシャルのパフェに一粒マスカット秀

校長の訓辞長々鯛雲

葡萄垂るワクワク止まず品定め

鶴川山百合句会 (鶴川)

枝豆は先輩新人かかはりなく

再会もそこそこ枝豆茹でががる

故郷のばばちやが作りしただちや豆

鯛やうする記憶に残るひと

鯛や夜勤の母が出てゆけり

枝豆は好きなポースで食すべし

宿坊に胡麻豆腐の香夕ひぐらし

鯛や足踏みミシンの健在

鯛やぼつりぼつりと街路灯

美智枝

真理

茂子

多美子

マスマ

茂子

和子

治江

夏江

秀子

栄子

みき子

八州男

廉三

雄二郎

喜久

史代

知子

千春

萬蝶

玲子

芽吹句会 (浦和)

星月夜琵琶の奏つるアルペジオ
宮の森入れば秋声天地より
行く雲の影おく池塘秋の声
鳥たちの流れ立つ枝も秋の声
磨ぎ汁の流れに消ゆる星月夜
秋声や朝食前のいす坐禪
ダム完成湖面を渡る秋の声

青葉の会 (浦和)

秋茄子を一口残す寺の膳
根性で走るマラソン滝の汗
敬老日化粧若ぶり遺影撮る
空高し五輪めざして走り込む
敬老日いつもと同じ時過ぎて

さざきサークル (浦和)

鶉高音一直線の滑り台
糞虫の風の匂と陽のにはひ
糞虫や見かけ呑気に程遠く
糞虫や一人身の兄卒寿かな
背を揃ひ高音の鶉は宙に飛ぶ
糞虫や寒さにそなへ糞を着る
母の帯のリメイク手提げ百舌競ふ
糞虫の空の輝き覗き見る

朝子 千重子 玲子 チアキ ひろこ 富子 徹
啓子 公子 洋子 和子 輝翠
啓子 千種 喜代子 かつ子 和枝 雅代 タイ 和子

花衣の会 (浦和)

真ん中が一番好きと棹の雁
宿の傘借りて湯めぐりみだれ萩
切通し越えればそこに葛の花
雁渡るくれゆく里に親子づれ
青き海小さな駅舎カンナ燃ゆ
村芝居雁の声にて幕降りる
背伸びして野原見渡す女郎花

和歌山水明句会 (和歌山)

新涼や遠山裾を列車の灯
秋天へ昇る梯子の裾支へ
隣の客に耳すます犬星月夜
吾亦紅大泣きしたと凜々し喪主
盆踊もう踊れない踊りたい
飲み好きの翁の顔や新走り
墨染めの足取り軽し秋の風
大人びて見える日焼の始業式
落鮎や鬼手仏心でうつ投網

かわせみ句会 (浦和)

居酒屋に集ふ猫どち月今宵
金木犀こぼし朝刊届きけり
信号を待つ間名月清かなり
縁先に祖母ある思ひ金木犀

みよ 京子 みち 峯雄 眞臣 治 章嘉 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 美恵子 洋子 廸代 敏子 智子 順子 良枝

満月は規則正しく上り来る
名月を眺むる一間つれづれに
ほつこりと窓枠浮かぶ月今宵
名月は心に宿る真如月
名月や池塘に立ちぬかくや姫
たかな俳句会 (川口)

急登の霧と鎖と力瘤

連山の霰といふ鬢霧湧けり
伝へたきこと薄れゆく夕の霧
夕霧や秘むる恋慕の宇治の川
天風に霧が払はれ剣が峰
霧深し朝の牛乳棒飲み

神戸大池句会 (神戸)

いく度も霧にとざされ六甲山下る
夕西時かぬ鶏頭墓碑の前
庭隅に住処の野菊花を待つ
ゴンドラの一人遊びや台風裡
水明鬼石句会 (鬼石)
災害で電気水なし月も出ず
石つぶて受けて草むら穴まどひ
境界の堀ひしやげたり台風禍
秋夕焼風まで紅く見ゆるほど
百年の古き二階や虫の夜

信子 保子 友子 治郎 育子 鶴城 水尾 静香 真知子 妃実子 純枝 玲子 千津子 礼子 早苗 洋子 和子 聡子 紀子 ナオ子

ミモザの会 (横浜)

退職の夫に寄り添ひ秋の雲

寄宿舎にあかりが灯り九月かな

噴煙の名残りのやうな秋の雲

秋雲ややり残したことやれること

秋の雲袍に古き住所録

天高し寄港してゐる豪華船

秋雲や気のむくままに寄港せり

京橋や垂直に見る秋の雲

新樹の会 (浦和)

蟬螂の手まねき人を喰つた貌

外野席白球弾みて翳雲

流星や判断つかぬまま仰ぐ

月見するウサギさんはと君が聞き

糞虫の外には出さぬ糞の中

黒猫に遅れて三毛も来て月見

天窓を仰ぐベッドの月見かな

「外郎売」の口上長し秋まひる

観月や雲間に細き薄明り

水明大阪俳句会 (守口)

初さんま大海原に研かれて

雀さへ黙らすほどの残暑かな

稜線に夕日の余光秋気澄む

知子

慶子

史代

栄子

玲子

亜弥子

萬蝶

千春

鶴城

清吉

宣子

平通

京子

韶子

紅花

徹

でん治

洋子

ゆら女

ヒサ子

鉦叩き一条戻橋渡る

向日葵や大地を見つめ種熟す

閉店の貼り紙濡らす秋の雨

秋麗背丈伸びたる甥のひげ

起き伏しの一問仏とあて秋思

鍵盤おどる黒人の指秋暑し

俳句の手ほどき (山右衛門)

千円札の英世の癖毛雨の月

千両箱は重くて小さし豊の秋

大楠の樹齡千年秋夕焼

秋の海千尋の底に御紋章

爽やかに千鳥格子のパンタロン

灸花千も咲かせば熱からむ

展示物の千人針や終戦日

竹一幹雨月の庭に反り返る

役者絵の写楽の謎や後の月

旗振れば渡し舟くる水の秋

髪黒き旅券の写真秋の 파리

吸呑みに鳴る喉仏秋の水

王義之の写本の真偽秋ともし

秋水を己の墓に掛けにけり

千切り絵の和紙の重なり草紅葉

水明小川句会 (小川)

露座仏の膝に零るる萩の雨

一木

智恵子

卓也

人美

和子

敦子

倭子

かつ子

水尾

美佐尾

佐江

ます美

慶子

義子

延昭

藤十郎

徹平

草太郎

翔太

忠男

順子

草太郎

一山を占めたる葛の花匂ふ

禅寺の磴に色添ふこほれ萩

命あと幾許たるや秋の蟬

主婦の座をわたせば軽ろし萩の花

文に添へ想ひ伝へし白桔梗

朝日早や箒のあとへこほれ萩

七草や月に似合ひの花ばかり

延延と一本の道芭原

骨太の兜太の文字如尾花

千代子

栄子

武

みや

綾子

和子

きよ子

むら子

藤十郎

水明創刊 90 周年 記念祝賀会・全国大会のご案内

■記念全国大会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 9 時 30 分 開会 10 時 閉会 15 時 30 分
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルプリンセス A・B」
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町 2-5-1 ☎ 048-827-1111
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞、記念特別作品
の授賞、新誌友紹介者の表彰、新季音同人、新同人の紹介、
兼題入選句の発表・受賞・講評など

■記念祝賀会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 15 時 30 分 開会 16 時 閉会 19 時
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルクラウン A」(住所、☎は全国大会と同じ)
行 事 来賓挨拶、俳壇著名人のビデオメッセージ、大福引大会など

■参加費 (5 年前の水明 85 周年記念祝賀会・全国大会と同額)

記念全国大会・祝賀会	25,000 円
記念全国大会のみ	8,000 円
記念祝賀会のみ	20,000 円

■宿泊斡旋

宿 泊 日 令和 2 年 6 月 28 日 (日) および 29 日 (月)
宿 泊 先 ロイヤルパインズホテル浦和
宿 泊 費 シングル 11,500 円 ツイン 10,500 円 × 2 = 21,000 円
*ともに朝食・消費税・サービス料込み
*料金は令和元年 7 月現在のものです、今後変更の可能性あり
*支払いはチェックイン時にホテルへ直接お願いします

■申込み・締切 未定 (追って詳細をお知らせします)

◎減多に無い貴重な機会です。ベテランはもとより、新入会員の方々も
お誘い合わせて多数ご参加下さい。みんなの力で祝賀会・大会を盛り
上げましょう。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

水明創刊 90 周年 記念特別作品募集

記念祝賀会・記念全国大会のご案内の通り、水明創刊 90 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ、評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外はどなたでも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は 6 月 29 日の記念全国大会で行います。

応 募 要 領

【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。

【応募部門】 ①俳句作品：30 句（400 字詰原稿用紙を使用）

②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 6 枚程度）

③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 12 枚程度）

◆原稿用紙は各部門ともに、タテ書き用 B 4 判 400 字詰を使うこと。

◆文字は、選考委員が容易に判読できるよう楷書で丁寧に書くこと。ワープロやパソコン入力による原稿も可。

◆いずれも未発表作品に限る。（水明誌および外部に発表した作品は不可）

◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）を書き、その下に姓名（俳号）を書く。

◆複数部門への応募も可。

【応募締切】 令和 2 年 3 月 31 日

【作品送付先】 〒 339-0067 さいたま市岩槻区西町 5 - 6 - 38

山中順子 宛 *「記念特別作品」と朱書する。

【選考委員】 主宰・山中順子・星野和葉・境延昭・五明昇・網野月を

◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、授賞者を決定します。

【授 賞】 俳句・エッセイ・評論それぞれの部門に授賞します。

正賞：各部門とも賞状と副賞 5 万円

準賞：各部門とも賞状と副賞 2 万円

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 山中順子 (☎ 048-756-1253) へお願いします。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

令和元年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応募句	未発表作品：15句（表題を付す） 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締切	令和2年2月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（7名）

山本鬼之介 山中 順子 星野 和葉
茂木 和子 境 延昭 五明 昇
網野 月を

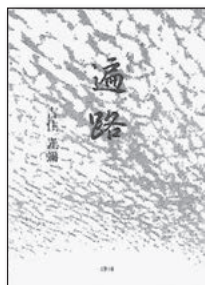
新珠賞推選委員（6名）

宇田 白鷺 大橋 勉代 大村 節代
小林萬二郎 椎野美代子 波多野寿子

『俳句界』(10月号)

この本この一句

前北かおる



『遍路』
吉住光彌

A5判・上製・カバー装

オリジナル

定価 本体2667円+税

ISBN 978-4-86438-830-6

室の花一枝を加へ世の豊か

「室の花」というと蘭やシクラメンなどを思い浮かべますが、これは桜か桃かも知れませんが。温室で蕾を太らせた一枝を、自宅の花瓶に挿したのでしょう。すると、その一枝が家の中を明るくし、あまつさえこの世の中全体を豊かにしてくれるように感じたという俳句です。「世の豊か」という飛躍が、春への期待を一気に花開かせてくれるようです。

実は、句集では直前に「妻昇天」という注釈の入った句が収録されています。室の花が作者個人の慰めとしてではなく、現世讃歌として詠われているところに感銘を受けました。

一九二四年山形県生まれ。「水明」同人。

新春俳句大会のお知らせ(予告)

【日 時】 令和2年1月30日(木)

【会 場】 さいたま市民会館うらわ 101 集会室

さいたま市浦和区仲町2-10-22 TEL 048-822-7101

JR 浦和駅西口より徒歩 10 分

浦和ロイヤルパインズホテルの裏

※詳細は「水明 12月号」にて発表

行事部・第一例会

風 声

○俳句九月号―「新刊案内」欄で吉住光彌の句集『遍路』を紹介。

人は皆遍路の途中鰯雲

光彌

○俳句界九月号―「話題の新刊句集」欄で吉住光彌の句集『遍路』を紹介

人は皆遍路の途中鰯雲

光彌

梅花二分抱つこ紐より足二つ

○現代俳句九月号―「新入会員記念作品」欄

始まりはチェロの独奏秋深し

野田静香

うすらひを飛び越えて行くおにごっこ

渋谷きいち

ぐらつぐらつと昇る太陽夏の山

西幅公子

夏空や大地を進むトラクター

越田栄子

地鎮祭聞こし召したか大蚯蚓

原田秀子

「現代俳句の風」欄

片時も止らぬ地球神の留守

近藤徹平

ががんぼへ口へ刺しもせず鳴きもせず

町野広子

気後れの後姿や穴惑ひ

丸山マシミ

「新刊案内」欄で吉住光彌の句集『遍路』を紹介。

刈田道むかし人買ひ赤紙も

光彌

○くちら（中尾公彦主宰）九月号―「受贈誌美術館」欄

思ひかよへば鈴蘭の鈴鳴ることも

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）九月号―「受贈誌御礼」欄

苦葺きの茶亭いろどる鉄線花

鬼之介

○苧（山本一步主宰）九月号―「受贈誌の一句」欄

降り立てば古き駅舎に薔薇の門

野田静香

○新月（松田碧霞主宰）九月号―「受贈俳誌紹介」欄

苦葺きの茶亭いろどる鉄線花

鬼之介

○太陽（柴田南海子主宰）九月号―「一誌一耀」欄

時の日や長針だけの園児の絵

鬼之介

○天穹（屋内修一主宰）九月号―「主宰句紹介」欄

薪能われは心の足はこび

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）九月号―「諸家近詠」欄

時の日や長針だけの園児の絵

鬼之介

○野火（菅野孝夫主宰）九月号―「俳・句・月・評」欄で森

村和弘氏が波多野寿子の一句を鑑賞。

しだれざくらお城の庭の野点傘

寿子

○山彦（河村正浩主宰）九月号―「諸家近詠」欄

元年の葉桜越しに二重橋

鬼之介

水明発展基金御札

(敬称略)

— 九月三十日現在 —

飯田 忠男	10	口	松本 光子	2	口
山戸 美子	3	口	矢島 清	5	口
森下美智枝	10	口	内田 恵子	2	口
水落 守伊	5	口	田中 章嘉	2	口
松宮 保人	10	口	近藤 徹平	1	口
松田 朋子	3	口	山中 順子	2	口
(小計41口)			福田藤十郎	2	口
— りんどう忌にて —			田中 千穂	2	口
青木 鶴城	1	口	大場 順子	1	口
茂木 和子	2	口	松井由紀子	1	口
保坂 翔太	1	口	森川 義子	1	口
石井 喜恵	2	口	矢作 水尾	1	口
星野 和葉	1	口	河野はるみ	2	口
日高 徹	2	口	五明 昇	2	口
丸山マシミ	1	口	小林萬二郎	2	口

常任運営幹事

青木 鶴城氏
保坂 翔太氏

右二名は常任運営幹事に就任されました。

謹 弔

吉澤 純枝様(季音同人)は、病気の為
九月三十日逝去されました。
謹んで哀悼申し上げます。

訂 正

次のように訂正してください。

十月号十五頁上段七行目 秋入口 ↓ 秋入日

袖木 治子	3	口	原田 秀子	1	口
神田 治江	1	口	大塚 茂子	1	口
越田 栄子	1	口	(小計46口)		
鈴木 和子	1	口	— 合計 87口 —		

後記

台風19号は各地に被害を残し去っていった。ハザードマップの土地の方達は早目に準備していたのにも拘わらず多数の犠牲者が確認された。自然の猛威には人間の力は簡単にひねられてしまう。5年に一度の台風といわれていたが、毎年発生することもあり得たこと。地球はだんだん狂って来ているのだろうか。こわい。

私のふるさとの千曲川の氾濫には目が離せなかった。平素は穏やかな清流で、今は落鮎の季節で賑わうのにもと思うと胸が痛む。犠牲になられた方達に何も出来ない私に苛立ちを覚える。でも日本人は強いから立ち上るのも早いと思いきから御見舞申し上げます。

昨日前主宰光二先生の一周年の追善供養が修せられたが、一年は早いものである。新主宰を迎えて水明もやっと平常の軌道に戻った。十月十九日の法要の折、若い人達の団結にお力を下さいと手を合わ

せた。金木犀が匂っていた。(順子)

テレビコマーションや広告などで美容に関する事、食に関する事など過剰な宣伝と思われるものが多々ある。例えば、

野菜不足：乳酸菌百億個入りの青汁

膝関節等：りようしんJ.V錠 一日一回三粒

美容関係：一つのクリームで六つ効能、シリコンを注入

し放れい線を失くし若さを保ち維持出来る。便秘解消：ごほう茶を飲んでお腹すっきり等

右の様なものは、ほんの一部で更にお試し価格が半額配布、使用した人の利き目の効果を載せ購買心を煽る。これで本当に痛みがとれ美人になれるのなら誰もが飛びつきたくなる。私も、でも、一寸

待て人は外見だけではないぞ」と健康管理は自分自身との戦い、

皺、シミがあっても健康で美しい笑顔で歳を重ねたい：私。(和子)

先日、或る料亭で食事をした。

帰りに出口の所の箱に入った松笠とどんぐりが置かれていて「どうぞいくつでもお持ち帰り下さい」と貼り紙があり、紙袋まで添えてあった。三つ程頂いて来て玄関に置く。先に拾った「蓮の花

托」「烏瓜」自然乾燥のドライフラワー等がある。色が褪せたりしてそろそろ捨てようかと思っていた所だったが仲間入りさせた。

昨日「新松子」で句を詠んだばかり「松の芯」「松の緑」も春に詠んでいるが「松の花」があるのを今更ながら知った。晩春、松の緑の先端に一から数個の紫色の雌花、半ばかり下に黄色の雄花が群がってつく。雌花は雄花から花粉を受けるがそのまま冬を越し、翌年の春に受精が行われ秋に新松子となる。その後褐色となり松笠となる。このまま四、五年も枝に残っていることもあるらしい。普段、親しんできた松ぼっくりの出来る過程が何となく分かってきた。

水明

令和元年十一月号

通巻一〇七〇号

令和元年十一月一日発行

発行人 山本 鬼之介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二八

電話 048-886-1600三

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四一〇二二

電話 048-822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇一〇一九三九三

印刷所 中央美版

季音抄 鬼之介

この晩歳跳ぶに助走を秋の水
秋の昼ゆらりとひらく茉莉花茶
鳥渡る空の信号知りつくし
蹲踞や碎け散る月掌に受くる
砂利道やトルコ桔梗を持って参る
鯛雲枝に掛けたるラガーシャツ
尼五山いよ臍長けし十三夜
萩の風写経の袖をたくしあぐ
月今宵遠くとほくに思ひ人
星月夜耀変茶碗さながらに
斜め癖つきし墨する秋の夜
秋涼や少し淫らな松の脂
秋の晴僧一列にほんのくほ
鯨の尾の反り美しき十三夜
竹一幹雨月の庭に反り返る
秋の海千尋の底に御紋章
老松に良夜の明かりもれ出づる
水に棲み水に潜れぬ水馬

山中 順子
山中みどり
由良ゆら女
吉住 光弥
網野 月を
石井 喜恵
藤澤 喜久
吉澤 純枝
渡辺 舍人
柚木 治子
荒井 俱子
森田 祥絵
田中 千穂
大場 順子
森川 義子
山田美佐尾
松宮 保人
原田 想子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水明抄 鬼之介

覇者いづこ墳丘わたる秋の風
 地ビールや琥珀の底のメランコリー
 カルタゴの海の青さよ花石榴
 海霧深し生まれ故郷は今他国
 一匹の蚊を討ち果たす丑の刻
 秋の風牛の睫が反りかへる
 カフェの灯が消えて岬の星明り
 なめらかなる沼のゑくほにあめんぼう
 呼び止めてすぐ追ひ立つる行行子
 陽の落ちて影絵となりぬ芒原
 始まりは「とりあへず」と言ふビールかな
 四本の足の不具合茄子の馬
 廃屋と思しき庭の枇杷たわわ
 秋暑し宿に帯解く影法師
 星月夜貧しき国の頭上にも
 散歩道往きもかへりも桐一葉
 赤とんぼ赤を供ふる仏みち
 踊り子の月まで伸びむ指の先
 原田 秀子
 正木 萬蝶
 日高 徹
 近藤 徹平
 保坂 翔太
 越田 栄子
 野田 静香
 大塚 茂子
 曲淵 徹雄
 渋谷きいち
 青木 鶴城
 太田 絹映
 加藤でん治
 田中 章嘉
 新 曆文
 河野はるみ
 神田 治江
 笹本 啓子

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3木曜・午後1時	本所ビッグシップ	山中みどり	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水明例会案内

水明 令和元年十一月一日発行 毎月一日発行

(第九十二卷 第十一号) 定価 一〇〇〇円